

課程博士学位論文

スンダ語の受け身構文について  
日本語の「～(ら)れる」との対照を通じて

イヌ イスナエニ シディック

平成 27 年 3 月

名古屋大学大学院文学研究科

## はじめに

スンダ語はオーストロネシア語族の一つであり、インドネシアの西部ジャワ地方で話されている語である。現在、スンダ語の話者が 2700 万人あり、ジャワ語に続いて、インドネシアでは 2 番目に話者が多い語である。とはいえ、スンダ語はインドネシア語やジャワ語などと違って、あまり研究されてこなかった。そのため、スンダ語を対象とした研究は少ない。それを一つのきっかけとして、本稿は、スンダ語の理解を深めること、及びスンダ語に関する記述を増やすことを目的とするものである。その方法として、先に数多く研究されてきた日本語との対照を行うことである。

本稿は日本語との対照を通して、スンダ語の受け身構文を意味的・統語的に分析し、そしてスンダ語に置ける自／他動詞の再考察を行う。

また近年は、グローバル化が進むとともに、国と国の国境が透明化されつつある。そのため、国際交流が進むように、異文化の理解が要求される。その中、最も重要な役割を果たせるのはコミュニケーション手段である語である。お互いの語を知り、分かり、使えることによってコミュニケーションがスムーズになり、結果的に、お互いの文化の理解につながる。スンダ語話者のスンダ人も例外ではない。現在西部ジャワにある大学では、外国語を専門とする学生が増加しているが、その中でも急増しているのは日本語を学ぶ学生である。その主な原因は 2 つあると思われる。まず、現地での日本語ポップカルチャーの普及である。その次、日本企業が年々インドネシアで拡大すると同時に、日本語が話せる人材の需要も拡大している。そのため、インドネシアの若者が、日本企業での採用を目標にして日本語を勉強すると考えられる。

当然、日本語とスンダ語の間に類似点があれば、相違点も多くある。例えば、スンダ語の動詞には活用が見られないが、日本語の動詞に時制の変化などによる活用があるという相違点である。そのような相違点、若しくは類似点を理解することによって、誤解が生じずに、お互いのコミュニケーションがスムーズに取れると期待される。そのため、スンダ語と日本語の対照研究の重要性が高まる一方、筆者が知っている限りでは、日本語とスンダ語の対照研究は皆無である。それも日本語とスンダ語の対照研究を行うきっかけである。

本論文の執筆にあたって、ご指導をいただいた名古屋大学大学院文学研究科の町田健教授と佐久間淳一教授をはじめ、そしていつも励ましてくれた最愛の家族に心から感謝を申し上げます。

2015 年 3 月 6 日

筆者

## 目次

序章 本研究の目的と論文の構成.....	- 6 -
1. はじめに .....	- 6 -
2. 本研究の目的 .....	- 10 -
3. 論文の構成.....	- 10 -
第1章 .....	- 12 -
スندا語の「di-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」との対照研究 .....	- 12 -
1. 問題提起.....	- 12 -
2.1.2 日常言語使用における「di-動詞」構文の意味.....	- 17 -
2.2 「di-動詞」構文とモダリティ表現との共起性 .....	- 23 -
2.2.1 可能表現.....	- 23 -
2.2.2 義務表現と禁止表現 .....	- 24 -
2.2.3 願望表現.....	- 25 -
3. 「di-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」との対照 .....	- 26 -
3.1 情報構造の違いについての対照 .....	- 27 -
3.2 意味と機能についての対照 .....	- 28 -
3.3 他のさまざまな表現との共起性についての対照.....	- 30 -
第2章 .....	- 32 -
スندا語の「ka-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」との対照研究.....	- 32 -
1. はじめに.....	- 32 -
2. 非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文の特徴について .....	- 33 -
2.1 形態的な特徴.....	- 34 -
2.2 非意図的受け身の「ka-動詞」構文の意味的な特徴について .....	- 35 -
2.3 非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文の構文的な特徴について .....	- 37 -
2.3.1 非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文と能動文の関係 .....	- 37 -
2.3.2 非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文の主語について .....	- 38 -

2.3.3 非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文の動作主について .....	39 -
2.4 非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文の成立条件について .....	39 -
3. 結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文の意味的な特徴について .....	40 -
3.1 結果状態の陳述/受動完了用法の「ka-動詞」構文の形態的な特徴について ...	40 -
3.2 結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文の意味的な特徴 .....	42 -
3.3 結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文の構文的な特徴 .....	44 -
3.3.1 結果状態の陳述用法「ka-動詞」構文と能動文との対応性 ....	44 -
3.3.2 結果状態の陳述用法「ka-動詞」構文の主語について .....	45 -
3.3.3 結果状態の陳述用法「ka-動詞」構文の動作主について .....	46 -
4. 自発用法の「ka-動詞」構文について .....	48 -
4.1 自発用法の「ka-動詞」構文の形態的な特徴 .....	49 -
4.2 自発用法の「ka-動詞」構文の意味的な特徴 .....	50 -
4.3 自発用法の「ka-動詞」構文の構文的な特徴 .....	51 -
4.3.1 自発用法の「ka-動詞」構文と能動文との対応性 .....	51 -
4.3.2 自発用法の「ka-動詞」構文の主語について .....	52 -
4.3.3 自発用法の「ka-動詞」構文の動作主について .....	53 -
4.4 自発用法の「ka-動詞」構文の成立条件について .....	54 -
5. 可能文用法の「ka-動詞」構文について .....	55 -
5.1 可能文用法の「ka-動詞」構文の形態的な特徴について .....	56 -
5.2 可能文用法の「ka-動詞」構文の意味的な特徴について .....	58 -
5.3 可能文用法の「ka-動詞」構文の構文的な特徴について .....	59 -
5.3.1 可能文用法の「ka-動詞」構文の能動文との対応性 .....	59 -
5.3.2 可能文用法の「ka-動詞」構文の主語について .....	59 -
5.3.3 可能文用法の「ka-動詞」構文の動作主について .....	59 -
5.3.4 可能文用法の「ka-動詞」構文の成立条件について .....	60 -
6. 自動詞の受け身の「ka-動詞」構文について .....	60 -

7. 「ka-動詞」構文と日本語の「～（ら）れる」との対照 .....	- 60 -
7.1 自発用法「ka-動詞」構文と日本語の「～（ら）れる」の自発用法の対照 .....	- 61 -
7.2 可能文の「ka-動詞」構文と日本語の「～（ら）れる」との対照 .....	- 62 -
第3章 .....	- 66 -
スンダ語における自動詞・他動詞の再考察 .....	- 66 -
1. 背景.....	- 66 -
2. 先行研究と問題提起 .....	- 66 -
3. スンダ語における自動詞と他動詞再考察 .....	- 68 -
3.1 定義と自他別の動詞分類について .....	- 68 -
3.3 スンダ語における動詞について .....	- 75 -
3.3.1 スンダ語の基本動詞について.....	- 75 -
3.3.2 スンダ語の派生動詞について.....	- 75 -
3.3.3 スンダ語における自他対応の有無による動詞分類 .....	- 76 -
3.3.4 スンダ語における有対自動詞と有対他動詞の形態的対応について .....	- 77 -
第4章 .....	- 79 -
結論 .....	- 79 -

## 序章 本研究の目的と論文の構成

### 1. はじめに

スンダ語では、受け身表現手段として主に「di-」構文と「ka-」構文が用いられる。以下の例を観察してみよう。

- (1) Budi ditenggeul ku Ujang

ブディ di-殴る に ウジャング

ブディはウジャングに殴られた。

- (2) Budi katenggeul ku Ujang

ブディ ka-殴る に ウジャング

ブディはウジャングに（非意図的に）殴られた。

(1) と (2) を見れば分かるように、(1) の「di-tenggeul (殴る)」はどの言語にもある直接受け身文である。一方 (2) の「ka-tenggeul (殴る)」は、日本語の訳では同じく「殴られる」という意味を表すが、(2) では「ka-動詞」構文を使うことによって「ウジャングさんは間違いなく、ブディさんではなく、他の人物を殴ろうとしたが、ブディさんに当たってしまった」というふうに解釈しなければならない。つまり、「di-動詞」と「ka-動詞」構文は動作主の意図性の有無という点で異なっている。前者の動作主は意図的に事象を起こすが、後者の動作主は非意図的に事象を起こしてしまう。そして後者は、主語となる非動作主が起きた事象によって望ましくない影響をうけるという意味を含意するという (Budi R. (1996))。また (1) の「di-動詞」構文には (3) の能動文の「N-動詞」が対応するが、「ka-動詞」構文は対応する能動文を持たないという。

ブディの他に、Husein Widjajakusumah (1985:114-138) の中で、S. Coolsma はスンダ語の受け身構文について次のように述べた。スンダ語における受け身構文は二種類に分かれて、それぞれ第一受け身構文と第二受け身構文という。



第一受け身構文は、形態的に第一クラスの動詞から第五クラスの動詞に接頭辞「di-」を付して構成される構文である<sup>1</sup>。

例：di- + ngadahar	→	didahar
食べる		食べられる
di- + ngadatangan	→	didatangan
訪ねる		訪ねられる
di- + ngadiukkeun	→	didiukkeun
座らせる		座らせられる
di- + mangneangankeun	→	dipangneangankeun
探してあげる		探してもらう
di- + nyanghareupan	→	disanghareupan
向き合う		向き合われる

それに対して、第二受け身構文は、第一クラスの動詞から第三クラスの動詞に接頭辞「ka-」を付して構成される構文である。

例：ka- + mawa	→	kabawa
持っていく		持って行かれる

<sup>1</sup> S. Coolsma (1985) はスンダ語の動詞を基本動詞と派生動詞に分類した。さらに、派生動詞を語幹 (Root) に付する接辞によって 17 クラスに分けた。即ち：第 1 クラス動詞 (N-語幹)、第 2 クラス動詞 (N-語幹-an)、第 3 クラス動詞 (N-語幹-keun)、第 4 クラス動詞 (mang-語幹-keun)、第 5 クラス動詞 (nyang-語幹-an/-keun)、第 6 クラス動詞 (barang-語幹)、第 7 クラス動詞 (語幹-an)、第 8 クラス動詞 (語幹-eun)、第 9 クラス動詞 (pi-語幹-eun)、第 10 クラス動詞 (語幹の一部重複)、第 11 クラス動詞 (語幹の一部重複-an)、第 12 クラス動詞 (pa-語幹-an/θ)、第 13 クラス動詞 (silih-語幹)、第 14 クラス動詞 (si-語幹)、第 15 クラス動詞 (ti-語幹)、第 16 クラス動詞 (語幹+um-)、第 17 クラス動詞 (語幹+in-)。

ka- + ngadatangan	→	kadatangan
訪ねる		訪ねられる
ka- + nuliskeun	→	katuliskeun
書く		書かれる

次に、それらの動詞が文中にどのように振る舞いをするかを見てみよう。

- (3) Ujang nenggeul Budi                      ⇔ Budi ditenggeul ku Ujang  
 ウジャング N-殴る ブディ                      ブティ di-殴る に ウジャング  
 ウジャングはブディを殴った。                      ブディはウジャングに殴られた。

一見すれば、「di-動詞」構文も、「ka-動詞」構文も両方受動態であり、さらに他動詞から成っているため、日本語の直接受け身に対応するように見える。しかし、実際は必ずしもそうではない。例えば(4)の「di-動詞」構文の場合である。

- (4) Mangga dileueut.

どうぞ di-召し上がる

どうぞ召し上げられてください。→ どうぞ召し上がってください。

スندا語の命令文は通常能動態が用いられるが、(4) のように受動態である「di-leueut (召し上がる)」構文で表現することによって、命令の度合いが和らぐとともに相手へのさらなる敬意が表されるという。

「di-動詞」構文と「ka-動詞」構文の他に、スندا語には自動詞から形成される受け身文も存在する。それは「ka-動詞-an」構文である。以下の例を観察してみよう。

- (5) Ujang Kahujanan. ← Hujan  
 ウジャング ka-雨が降る-an 雨が降る  
 ウジャングは雨に降られた。 雨が降っている。

- |     |                        |   |              |
|-----|------------------------|---|--------------|
| (6) | Ujang kadatangan tamu. | ← | Tamu datang. |
|     | ウジャング ka-来る-an 客       |   | 客 来る         |
|     | ウジャングは客に來られた。          |   | 客が来た。        |

上の文を見てわかるように、(5) と (6) の「kahujanan (雨に降られる)」と「kdatangan (来られる)」は、いずれも日本語の訳とよく対応し、日本語の間接受け身と類似している。

日本語の受け身は数多くの学者によって研究されてきた。特に自動詞から作られる間接受け身は日本語の特徴的な表現でもあるので、学者の注目を集めた。例えば、三上（1972）や佐久間（1966）などである。三上（1972：103）は、「主語に立つものが全て「被害」を被った」と主張し、「はた迷惑の受け身」と呼び、そして、佐久間（1966:212）は、「悪影響でこまり迷惑する場合の表現が圧倒的に多いのですが、好影響の場合もある」とし、「利



害の受け身」と呼んだ。

日本語の受け身は、基本的に「直接受け身」と「間接受け身」に分けられ、いずれも「～(ら)れる」を用いて表現される。しかし他言語と違って、日本語の受け身は他動詞だけではなく、自動詞からでも生産的に作られる。

(7) 太郎は雨に降られた。 ← 雨が降る。

(8) 太郎は客に來られた。 ← 客が來た。

これらの受け身構文はしばしば日本語の独特な表現で、他言語にはあまり見られない受け身の表現として捉えられているが、スンダ語でも接周辞「ka-an」の付加によって、自動詞から作られる受け身表現が存在し、意味的にも非常に類似している。またこれらのタイプの受け身文は、スンダ語でも対応する能動文を持っていない。

(9) Taro Kahujan. ← Hujan  
太郎 ka-雨が降る-an 雨が降る  
太郎は雨に降られた。 雨が降っている。

(10) Taro kdatangan tamu. ← Tamu datang.  
太郎 ka-来る-an 客 来る  
太郎は客に來られた。 客が來た。

(11) ? Taro kamaotan anakna. ← Anakna maot  
太郎 ka-死ぬ-an (彼の)子 (彼の)子 死ぬ  
太郎は子供に死なれた。 (彼の)子が死んだ。

例(9)と例(10)だけを見ても、確かにスンダ語の「ka-an」受け身構文は日本語の間接受け身とほぼ類似しているように見える。しかし、本当にそうであろうか。

(11)の述語は、形態的に(9)(10)と同じく「ka-自動詞-an」になっていて、日本語の訳のような意味を表すはずだが、実際にはそのような意味を表すことはない。それでは、上に述べた「ka-an」受け身構文は日常生活においてどのように使われているのか、どの程度使われているのか、そして、日本語の間接受け身のようには生産的に作られているのだろうか。

本稿では、しばしば研究されてきた日本語の「～(ら)れる」を手がかりに、対照研究を通して、スンダ語の受け身構文の実態を解明したい。また、スンダ語が話されているバンドン地方でも、日本語を学ぶ学生の数が増加している。当然、日本語の受け身を学ぶ際に、彼らは母語であるスンダ語の受け身文と比較しながら、理解しようとするだろう。そのため、誤用が発生する可能性もある。その上、スンダ語における受動態の使用頻度は日本語の受け身の使用頻度を遥かに上回るため、スンダ語から日本語に訳す過程において、誤用発生の可能性が増すだろう。次の例を観察してみよう。

(12) Buku nu keur dibaca ku urang pamere ti si Ujang.

本 機能語 di-読む に 私 pa-あげる から ウジャング  
？ 私に読まれている本はウジャングからの貰い物である。

(13) Buku nu keur dibaca ku urang pamere ti si Ujang.

本 機能語 di-読む に 私 pa-あげる から ウジャング  
私が読んでいる本はウジャングからの貰い物である。

例(12)で表される事象は、スندا語では通常受動態で表されるが、日本語に受動態のまま訳すと、日本語母語話者にとっては不自然だと感じられるであろう。従って、受動態で訳すより、能動態で表現する方が自然で一般的である。(12)と(13)のような例は発生しうる誤用の一例である。そのような誤用を避けるためには、やはりスندا語と日本語の受け身文を中心に対照研究を行い、両言語の間にある相違点と類似点を明確にする必要がある。

## 2. 本研究の目的

本研究は日本語の「～(ら)れる」との対照研究を通して、スندا語の受け身構文の実態を解明しようとするものである。同時に、スندا語の受け身構文と日本語の「～(ら)れる」のそれぞれの特徴及び両者の間の類似点と相違点を明確に述べ、両言語の受動文が互いにどのように対応するのかを明らかにしたい。そうすることによって、両者に対する理解をより深めることができる。また、本稿を通じて、スندا人の日本語学習者が日本語の「～(ら)れる」を使用する際の運用上の誤用が避けられることが期待される。

## 3. 論文の構成

本稿は、スندا語の「di-動詞」・「ka-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」の対照とスندا語の自他の再考察に大別される。

### 序章

本章では研究の背景、研究の目的と本稿の構成を述べる。

### 第1章「di-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」との対照研究

本章ではまず、スندا語の「di-動詞」構文について考察と分析を行い、その特徴と性質を把握する。その後、「di-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」との対照研究を行い、両者の相違点と類似点を明らかにする。

## 第2章 「ka-動詞」構文と日本語の「～（ら）れる」の対照

第一章と同じように、本章でもまず「ka-動詞」構文の特徴と性質を明確にし、その後、「ka-動詞」構文を日本語の「～（ら）れる」と対照して、両者の相違点と類似点を探る。

## 第3章 スンダ語の動詞分類と自他別の再考察

ヴォイスの一種である受動態を研究するには、その言語の自他別を含む動詞分類の考察が欠かせない。そのため、本章では、しばしば研究されてきた日本語における自他別の理論に基づき、スンダ語における動詞分類と自他別の再考察を行う。

## 第4章 結論

第一章から第三章までの分析によって明らかにしたことをまとめて、本稿の結論を述べる。

## 第1章 スندا語の「di-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」との対照研究

### 1. 問題提起

スندا語の教科書や記述などで、スندا語において最も典型的で頻繁に使用される受け身表現は「di-動詞」構文だといわれてきた。確かに、序章に述べた例(1)<sup>2</sup>のような表現を見ると、スندا語の「di-動詞」構文は形式的・機能的に西洋言語学で受動と呼ばれるものと類似している。しかし、それは「di-動詞」構文のごく一部分であって、その他の機能もある。「di-動詞」構文は使用頻度が高く、必ずしも他言語の受け身表現と一対一で対応するとは言えない。以下の例を観察しよう。

- (1) Mangga dileeut atuh.

どうぞ di-召し上がる 間投詞

直訳：どうぞ召し上がられてください。

→ どうぞ召し上がってください。

- (2) Baju teh diseseuh atuh!

服 間投詞 di-洗う 間投詞

直訳：服を洗われろ。

→ 服を洗いなさい。

- (3) Nu kitu mah atuh bisa dipigawe ku si ujang oge.

そのような 間投詞 間投詞 できる di-する に ウジャング も

直訳：そんな事はウジャングにされることが出来る。

→ それぐらいのことならウジャングさんもやれる。

- (4) Ibu dianos ku Pa Kades di kantor.

あなた(女) di-待つ に 村長 に 事務所

直訳：あなたは事務所で村長に待たれている。

→ 村長さんは事務所であなた(女性)を待っている。

(1) から (4) までの例は全て受け身表現ではあるが、西洋言語学で言う受動とは異なる用法である。スندا語の母語話者は、日常的にそのような表現を頻繁に用いることによ

---

<sup>2</sup>

- (1) Budi ditenggeul ku Ujang

ブティ di-殴る に ウジャング

ブティはウジャングに殴られた。

って、「di-動詞」構文の使用頻度が高くなると思われる。また、それぞれの例の日本語の訳を見てわかるように、スンダ語では受け身表現である「di-動詞」構文によって表される表現は、日本語では能動文で表される。(1)の例は能動文の *mangga ngaleeut atuh* “どうぞ召し上がってください”でも表現できるが、受け身表現を使うことによって命令度合いが軽減され、相手に対して高い敬意を表す効果が得られる。(2)の例は受け身表現によって命令を表す。(3)の例では、*dipigawe* の「di-動詞」構文は、*bisa* “できる”<sup>3</sup>と共起することによって“～されることができる”という受動的可能表現になる。また、(4)の例は丁寧の意味を表す。対応する能動文の「N-動詞」構文でも表すことは可能だが、受け身を用いて表すのが普通である。

このように、スンダ語「di-動詞」構文は形式的に受け身の意味を表しながらも、言語の運用においてさまざまな用法で用いられる。そのため、日本語の「～(ら)れる」に比べると使用頻度が高いと予測される。勿論、これまで、スンダ語の「di-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」の対照研究はなかったため、スンダ語の「di-動詞」構文の頻度が、実際にどれほど日本語の「～(ら)れる」を上回るのか、そしてスンダ語の「di-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」がどのような相違点と類似点をもっているのかは未だ明らかではない。したがって、それらを明確にすべく、本章では「di-動詞」構文の意味と機能进行分析し、日本語の「～(ら)れる」と対照を行う。

## 2. 「di-動詞」と「～(ら)れる」の対照

学校の教科書の中で、スンダ語の「di-動詞」(一部の例外を除く)は受け身といわれているが、日常的な言語活動では、単に受け身を表すだけでなく、さまざまな用法で用いられる。これについて、以下で詳しく考察していく。

### 2.1 「di-動詞」の意味と機能

Budi (1996)は「di-」接頭辞の機能について、能動態と受動態の両方を構成すると述べている。「di-」接頭辞は、「*damel* ‘働く’ (丁寧)」と「*gawe* ‘働く’ (普通)」に付加される場合は能動態を構成し、そして「*sapatu* ‘靴’」や「*baju* ‘服’」など体につけるものを指し示す名詞に付加されると、着る・履く・かぶるという意味の能動態を表す。また、この接頭辞は「*sada* ‘音’」という名詞に付加されると能動態を構成し、出すという意味を表す。しかし「di-」接頭辞は、上述した動詞と名詞以外に付加される場合は、受動態を構成するという。つまり、言語運用上、能動態を表す「di-」接頭辞に比べると、受動態を表す

---

<sup>3</sup> スンダ語の *bisa* は意味的、用法的に英語の *can* に類似する。

「di-」は多くの割合を占めている。そのことから、スンダ語の学校文法では、一般的に前者は例外として取り扱い、「di-」接頭辞の機能は受動態を構成することだとされている。

例：	a. damel	+	di-	→	didamel
	働く（丁寧）		接頭辞		働く
	b. sapatu	+	di-	→	disapatu
	靴		接頭辞		靴を履く
	c. sada	+	di-	→	disada
	音		接頭辞		音を出す
	d. baca	+	di-	→	dibaca
	読む		接頭辞		読まれる

受動態である「di-動詞」構文は能動態を表す「N-動詞」構文と対立するが、すべての「N-動詞」構文に対立する「di-動詞」構文があるわけではない。その要因は、「N-」接頭辞は、能動態を表す際に、他動詞と自動詞に付けることができるが、受動態を表す「di-」接頭辞は、他動詞にしか付けることができないからである。例えば、baca という他動詞に「N-」接頭辞を付けると Maca（読む＝能動態）になり、「di-」接頭辞を付けると dibaca（読まれる＝受動態）になる。それに対して、tangtung という自動詞に「N-」接頭辞を付けると nangtung（立つ＝能動態）になるが、「di-」接頭辞を付けて ditangtung\*（立たれる＝受動態）とすることはできない。この特徴から、スンダ語において「di-動詞」構文は直接受け身の用法とされている。また、「di-動詞」構文は必ず「N-動詞」構文と対立しているため、ある動詞の他動性を検証するための最も典型的な方法である（デディステディ 2006:305）。これについて、Coolisma (1985) は、「di-動詞」構文は形態的に第一クラスの動詞から第五クラスの動詞に接頭辞「di-」を付して構成される受け身構文であると述べている。第一クラスの動詞から第五クラスの動詞というのは最も他動性の高い動詞類である。とはいえ、各クラスを形成する形態素が異なるため、それぞれの動詞の性質も異なるであろう。そのため、それと対応する「di-動詞」構文もそれぞれ異なると考えられる。

本稿では、受け身構文の元となる「N-構文」とそれに対応する「di-動詞」構文を比較して、スンダ語の「di-動詞」構文の性質を考察していく。

### 2.1.1 「di-動詞」構文と「N-動詞」構文が伝達する情報の違い

発話者は、ある能動的な事象に関して、全く同等な情報を能動態と受動態で聞き手に伝えることができる。その違いは、動作主に焦点を当てて主語の位置に置くか、若しくは、被動作主に焦点を当てて主語の位置に置くかという点にある。それは、発話者が最も伝えたい情報は文頭に置かれるという言語運用の一つの特徴の現れであると考えられる。つま

り、受動態もしくは能動態を使うかは話者次第であり、伝達する情報の内容には変わりがないということになる。しかし、本当に能動態と受動態が伝達する情報は同じなのだろうか。

デディステディ (2006) は、スンダ語に近いインドネシア語の受動態と能動態が伝達する情報の違いについて次のように述べている。インドネシア語の談話は、ほとんどの場合能動態で始まり、その話の続きには受動態が用いられるという。このことから、デディステディは、能動文の被動作主句は新情報であるのに対して、受動文の被動作主句は旧情報であるとしている。果たしてスンダ語の場合はどうだろうか。それを検証するために、以下の例を考察してみよう。

- (5) Kahar mindeng elat mayar iuran sakola, ku kuring sok

カハル しばしば 遅れる N-払う 学費 に 私

dipangnalangankeun. (Aam Amilia, 2008:30)

di-救済してあげる

直訳：カハルはしばしば学費を遅れてはらった、私によってよく払ってあげられた。

→ カハルはしばしば学費を滞納していたが、(その時) 私はよく(それを)払ってあげていた。

- (6) Panon Ajang meh teu ngiceup nenjo budak ngora tiluan keur

目 アジャング ~ない N-瞬く N-見る 若者 三人 機能語

nurunkeun spanduk. Mun seug eta spanduk dibikeun ka manehna,

N-下ろす バナー もし その バナー di-あげる に 彼

tada teuing bungahna. Meureun adina moal karugrag, lamun imah

どんなに うれしいこと おそらく 弟 ~ない 再発病する もし 家

kardusna dituruban ku spanduk. Sawareh bisa dipake keur simbut

段ボール di-被せる に バナー 一部 できる di-使う ~ために 毛布

adina. (Aam Amilia, 2008 : 7)

弟

直訳：アジャングの目は瞬かずに、バナーを下ろしている三人の若者を見ている。

もしそのバナーが彼にあげられたらどんなにうれしいことだろう。彼の段ボールの家(仮設住宅)がバナーに被せられたら、おそらく弟は再発病しないだろう。(一部は弟の毛布の為に使われることができる。)

→ アジャングは目を瞬かずにバナーを下ろしている三人の若者を見ている。もしそのバナーを彼にくれたらどんなにうれしいことか。彼の仮設住宅にバナーを被せ

たら、弟の病氣も再発しないだろう。またバナーの一部は弟の毛布としても使うことができるだろう。

- (7) Baju haneut pamere Si Cikal dicakepkeun lebah dada, da karasa

服 暖かい あげたもの 第一子 di-寄せる 方向 胸 ~だから 感じられる  
angin tiis nyelesepe tina jandela. (Aam Amilia, 2008:37)

風 冷たい N-忍ぶ から 窓

直訳：第一子のあげたものである暖かい服（厚着）は胸の方向に寄せられた、なぜなら、冷たい風が窓から忍んでいたからである。

→ 冷たい風が窓から吹いてきたので、長男がくれた厚着を胸に寄せた。

例（5）と例（6）を見て分かるように、「N-動詞」構文で文が始まり、そして「di-動詞」構文はその後用いられている。例（5）では、被動作主である「学費」は「mayar」＝「N-払う」構文によって聞き手に新情報として伝達される。そして、次の文では、聞き手が「学費」を旧情報として既に把握しているため、「学費」という被動作主は省略され、「di-動詞」構文によって表されている。また、例（6）の最初の文は複文であるが、主節の述語は「nenjo」＝「N-見る」であり、従属節の述語は「nurunkeun」＝「N-下ろす」である。前者が伝達する新情報は「バナーを下ろしている三人の若者」で、後者が伝達する新情報は「バナー」である。そして、その続きの文では、聞き手が把握した旧情報である「バナー」が話の焦点になり、「di-あげる」と「di-被せる」と「di-使う」の「di-動詞」構文で表現されている。さらに、最後の文では、聞き手の頭の中に旧情報としてあるため、「バナー」が省略されている。

一方、例（7）は、例（5）（6）と同様に短編小説の始まりだが、上記の二つの例と違って、最初に「di-動詞」構文が用いられている。そうすると、話題となる新情報を伝える始まりの文としての機能と、旧情報を伝達する「di-動詞」構文の機能の間に矛盾があるように見えてしまう。しかし、例（7）を詳しく分析すると、矛盾がないということがわかる。その要因は、「pamere Si Cikal “長男のあげたもの”」という副詞節にある。「pamere」という単語を分解すると『pa-「N-bere “あげる”」』からなっている。つまり「厚着」は、「di-動詞」構文が伝える旧情報であると同時に、「長男があげた」を含意する「長男があげたもの」が伝える新情報でもある。また、他の要因として、例（5）（6）と違って、「厚着」は最初の文において被動作主の役割を担っているが、次の文では話題とされていないということも考えられる。

上記の議論をまとめると、スندا語の「di-動詞」構文が伝達する情報は、「N-動詞」構文が先導文で伝える新情報を旧情報として話し手から聞き手に伝達するものと言えよう。またスندا語では、「N-動詞」構文は動作主主題フォーカスであるのに対して、「di-動詞」



構文は被動作主主題フォーカスであると考えられる。

## 2.1.2 日常言語使用における「di-動詞」構文の意味

本稿では「d-動詞」構文の意味を二つに分けて考察を行う。即ち、被害、中立と受益の形態的な意味と命令法と丁寧さの派生的な意味である。形態的な意味には3つの意味があるが、それらの意味は構文がもたらした意味ではなく、動詞の語彙的な意味や文脈によって生じる意味である。一方、派生的な意味は「di-動詞」構文によって生じる意味である<sup>4</sup>。それらについては以下で詳しく述べる。

### 2.1.2.1 スンダ語の「di-動詞」構文の形態的な意味

本節では、スンダ語の「di-動詞」構文の形態的な意味だけではなく、動作主の有無にも注目する。「di-」構文は、動作主 (agent) の種類で分けると二つある。即ち、(i) 動作主のない「di-」構文と(ii)NP 動作主 (agent) と共起する「di-」構文である。(i)で動作主の無い理由としては、次の二つが考えられる。まず、最初から動作主 (agent) という要素が文中に存在しない場合がある。また、何らかの理由で動作主 (agent) が文から排除されている、若しくは背景化されている場合がある。

一方、構文を動詞の語幹別に分けると、基本動詞を語幹とする「di-」構文と派生動詞を語幹とする「di-」構文がある。ここで言う派生動詞というのは、「語幹+-an」接周辞と「語幹+-keun」接周辞、そして「pang-+語幹+-keun」接周辞によって形成される他動詞の派生動詞である。

#### a. 「di-」基本動詞構文

- (8) Nu disebut engke teh dina dunya politik mah hartina teh ngan tinggal

di-言う 次回 における 世界 政治 意味 だけ 後

nungguan waktuna.

待つ 時間

政治の世界では、次回と言われるものはあと時間を待つだけという意味です。→ 政治の世界では、次回というのは時間の問題だけを意味する。

- (9) Di antarana diajak ka Bandung ngahadiran konferensi Asia Afrika .

に その内 di-誘う へ バンドン 出席する 会議 アジアアフリカ

その内にはアジアアフリカ会議に出席するためバンドンへ誘われた。

---

<sup>4</sup> デディステディ (2006:307) は、性質的にスンダ語に近いインドネシア語において、「di-動詞」構文には、談話レベルで指令法と丁寧さという派生的な意味が考えられると述べた。

- (10) Dongeng kolot aki mangga *diaos* dina lampiran.  
 物語 親 おじいさん どうぞ di-読む で 添付  
 どうぞおじいさんの親の物語が添付で読まれてください。  
 → どうぞ添付されたおじいさんの親の証言をお読みになってください。
- (11) …pikeun para guru basa Sunda anu *dirojong* ku palaputra almarhum  
 ため たち 先生 語 スンダ di-支える に (by) 子供たち 亡き  
 Sobrie Hardjapamekas.  
 ソブリ ハルジャパメカス  
 亡くなったソブリハルジャパメカスの子供たちに支援されているスンダ語  
 の先生方のため…

例 (8)、(9)、(10) は (i) 動作主 (agent) の無い「di-」構文の例である。(8) では最初から動作主 (agent) がないのに対して、(9) と (10) の動作主は文脈によって省略されたと思われる。(8) の場合は、動作主が不特定で多数存在するので、「di-動詞」構文によって背景化されている。(9) の場合は、先行の文に動作主が現れているため、再び表さずに省略する方が自然である。そして (10) は命令文なので、受け身形を使うことによって二人称の動作主 (agent) が省略されても、解釈に支障が生じないと考えられる。また、例 (11) はスンダ語の受け身表現のもっとも典型的な例である。亡くなったソブリハルジャパメカスという人物の子供たちは動作主 (agent) であり、ku ‘by’ によってマークされている。またこのタイプの構文は、例 (8) ～ (11) を見てわかるように、語幹となる基本動詞の語彙的な意味によって中立または被害の意味を表す。

#### b. 「di-」－「語幹＋-an」

- (12) Mahesa *ditenggeulan* nepi ka babak belur.  
 マヘサ di-殴る-an まで に ぼこぼこ  
 マヘサはぼこぼこになるまで殴られた。
- (13) Anak ucing *diparaban* ku Momon.  
 子猫 di-餌-an に モモン  
 子猫はモモンに餌をやられた。→ 子猫はモモンに餌を食べさせてもらった。
- (14) Lain imahna ketang, imah nu *dicicingan* ku si Aceng.  
 ではない 彼の家 家 di-住む-an に アチェング  
 彼の家ではなく、アチェングに住まれている家だ。  
 → 彼の家ではなく、アチェングが住んでいる家だ。

例 (12) は (i) の動作主の無い受け身構文である。この文では、動作主が特定できないた

め、文中に現れないと考えられる。また「-an」は動作の反復を表す。(13)の「diparaban」の語幹は、paraban「餌をやる」という名詞由来の派生動詞である。(13)の「-an」は派生的な機能を持ち、間接目的語（二格をとる目的語）をマークする機能を持つ。一方(14)の「-an」は屈折的なもので、自動詞を他動詞化し、間接目的語をマークする。このタイプの受け身構文も、語幹の語彙的な意味によって被害(12)と中立(13)(14)の意味を表す。

#### c. 「di-」 - 「語幹+ -keun」

- (15) Yayasan Rancaage *diadegkeun* dina taun 1993.

財団 ランチャゲ di-建つ-keun に 年 1993

ランチャアゲ財団は1993年に建てられた。

→ ランチャアゲ財団は1993年設立された。

- (16) Ngahaja hayang *disumputkeun* di imah aing!

わざと ほしい di-隠れる-keun に 家 俺

(あいつは) わざと俺の家に(身を)隠してほしい。

- (17) Naha Nehru geus ngarampa yen putrana teh aya anleh kana politik,

疑問詞 ネフル 予想する 息子 ある 興味 に 政治

atawa ngahaja *ditataharkeun* ti anggalna …

又は わざと di-準備-keun から 前

ネフル氏は息子が政治に興味があるということを予想したのか、または前から

わざと準備されたのか… “

(15)、(16)、(17)はいずれも動作主がないタイプである。その理由は、動作主が不特定であるため、受け身構文の中で背景化されるからである。(16)と(17)では動作主が省略されたと考えられる。(16)の動作主は話し手と同じ人物でなければならない。(17)では、ネフル氏という動作主と彼の息子である受け手(patient)が先行の文に現れたため、後続の受け身構文では省略されることになる。また、(15)と(16)では、「-keun」は派生的な接辞であり、(17)では屈折的な接辞として機能している。このタイプの動作主は有情物でなければならない。また、このタイプの構文で表される意味は主に中立の意味である。

#### d. 「di-」 - 「pang-+語幹+ -keun」

- (18) Kuring kamari *dipangmeulikeun* tas ku kang Adud.

私 昨日 di-pang-買う-keun かばん に アドゥッド

私は昨日アドゥッドさんに鞆を買ってもらった。

(18)は、日本語の訳を見ればわかるように、他の人物にある行動をしてもらう、またはそ

の行動をしてもらったことによって何らかの影響をうけるという意味を表す。つまり、このタイプの受け身構文は受益の意味を表すと言える。また c タイプと同じように、このタイプの動作主も有情物でなければならない。そして、動作主が省略されることはまれである。

以上をまとめると、スンダ語の「di-動詞」構文は、派生動詞を含めて常に他動詞から作られるという特徴から、スンダ語の直接受け身構文に当たると考えられる。また、意味的には主に中立を表すが、語幹となる動詞の語彙的な意味によっては被害を表す場合もある。さらに、d タイプの受け身構文のように、主語が利益を受けるという受益の意味を表すものもある。

動作主の観点から見ると、a と b のタイプでは、有情物でも非情物でも動作主になりうるが、c と d のタイプの動作主は有情物でなければならない。その理由は、「-kan」の接尾辞が使役の意味を表すため、動作主は意図性の高い有情物でなければならないからである。また、動作主が不特定な場合は、背景化される傾向がある。

#### 2.1.2.2 スンダ語「di-動詞」構文の派生的な意味

上で述べたような形態的な意味の他に、スンダ語の「di-動詞」構文は派生的な意味も表すことができる。それは命令法と丁寧さの意味である。その要因は、スンダ語は最も注目したいことを文頭に置くという特徴を持つからだと考えられる。デディステディ（2006）は、インドネシア語に関して最も表現したいことを focus（焦点）と名付けた。彼は、インドネシア語の「meng-動詞」は subject focus、「di-動詞」は action focus または object focus だと述べた。スンダ語も同じような性質を持っているが、本稿では、一般言語学的な焦点（Focus）と混同しないように、動作主主題フォーカス、動作主題フォーカス、被動作主主題フォーカスという用語を使用する。

ここで、以下の例を観察してみよう。

(19a) Pulisi newak bangsat kamari.

警察 N-逮捕する 泥棒 昨日  
昨日警察は泥棒を逮捕した。”

(19b) Bangsak ditewak ku pulisi kamari.

泥棒 di-逮捕する に 警察 昨日  
昨日泥棒は警察によって逮捕された。”

(19c) Ditewak(na) bangsat teh ku pulisi kamari.

di-逮捕した 泥棒 間投詞 に 警察 昨日  
泥棒が警察に逮捕されたのは、昨日だ。”

(19d) Newak bangsatna pulisi teh kamari.

N-逮捕 泥棒-na 警察 間投詞 昨日

警察が泥棒を逮捕したのは昨日だった。”

上の例で分かるように、例 (19a) と (19b) は、それぞれ動作主主題フォーカスと被動作主主題フォーカスを表している。そのような現象はインドネシア語にも見られる。一方、動作主題フォーカス に関しては、インドネシア語と違って、スンダ語では、受動態だけでなく能動態でも表すことができる ((19c) と (19d))。ただし、それにはいくつかの条件がある。まず、その表現は口語的な表現として用いられる。次に、動詞<sup>5</sup>を名詞化する「-na」を、動詞である *newak*「逮捕する」に付加するのではなく、*bangsat*「泥棒」に付加する。さらに、強調する機能を持つ間投詞 *teh* を、動作主である「警察」の後ろに置かなければならない。このように、スンダ語は、最も言いたいことを文頭に置くという性質を持っている。さらに、それらのフォーカスは、命令法を含めて、さまざまな法（ムード）を表す文の中でも適用される。

#### a. 命令法 (imperative)

命令法とは命令・要求・懇請（否定の場合は禁止）など、相手に対する注文を述べるものをいう。一般的に多くの言語でも命令法は能動文によって表されるが、スンダ語では能動文と受動文を使って表すことができる。以下の例を見てみよう。

(20) Seseuh atuh baju teh!

洗う 間投詞 服 間投詞

服を洗え。

(21) Baju teh diseseuh atuh (ku maneh)!

服 間投詞 di-洗う 間投詞 に あなた

服は洗われよ。→ 服を洗え。

(20) と (21) は「服を洗え」という全く同一の命令を表すが、スンダ語では、(21) のように、被動作主を焦点化した受け身文による命令が可能である。また、動作主は第二人称である聞き手という共有知識があるため、文の中で省略されても解釈に支障がない。

#### b. 指令法 (jussive)

指令法は命令法的一种だが、a で取り上げた命令法とは違って、相手に直接命令するのではなく、主に第三人称に対して間接的に指示を与える法である。つまり、話し手が聞き手

---

<sup>5</sup> 形容詞にも適用できる。例、*panas* “あつい” → *panasna* “(その) あつき”

にやってもらいたいことを直接言わずに、あたかも相手以外の第三者にやってもらおうとするかのように間接的に依頼を伝える。

(22) Nu, abdi ngintun email, punten dibuka deui.

ヌ 私 N-送る メール すみません di-開く 再度

イヌさん、私がメールを送ったので、すみませんが再度開かれています。

→ すみませんが再度開いてください。

(23) Punte mailna dicek sakeudap deui.

すみません メール-na di-チェックする しばらくしたら 後

すみません、後しばらくしたらメールをチェックされています。

→ メールをチェックしてください。”

文の構造から見ると、(21) (22) (23) はいずれも同じように見えるが、(21) では聞き手が命令されていると感じられるのに対して、(22) と (23) では直接命令されたというニュアンスがなく、丁寧をお願いされていると感じられる。その要因は、(22) と (23) の「メールを開きますように」、「メールをご確認いただきますように」という言い方にある。(21) の「di-動詞」構文と違って、(22) と (23) の「di-動詞」構文は、*punte* 「すみません」、*mangga* 「どうぞ」と一緒に使用されることによって、指令法のニュアンスが発生したと考えられる。

#### c. 丁寧さ (politeness)

スンダ語にも日本語のように敬語体系<sup>6</sup>があるが、「di-動詞」構文を使うことによって丁寧さがさらに増すと考えられる。以下の例を観察してみよう。

(24) Bapak kepala sakola ngantosan Ibu di kantorna.

校長先生 (男性) 待つ (尊敬語) あなた (女性) で オフィス-na<sup>7</sup>

校長先生は校長室にあなたをお待ちになっています。

→ 校長先生は校長室であなたを待っています。

(25) Ibu diantosan ku Bapak kepala sakola di kantorna.

あなた di-待つ (尊敬語) に 校長先生 で オフィス-na

あなたは校長室で校長先生にお待たれになっています。

→ 校長先生は校長室であなたを待っています。

<sup>6</sup> スンダ語には *undak usuk basa* と呼ばれる敬語体系があるが、日本語のように特別なパターンによって生産的に作られるのではなく、それぞれの単語に、敬語の各レベルにおいて同一の意味を表す形式がある。

<sup>7</sup> -na というのは第三人称の所有格を表す *clitic* である。

(24) も (25) も *antosan* 「待つ (尊敬語)」という尊敬語を使っているが、丁寧さを比べると、(25)の方が丁寧である。それは、(25) では、受身文を使うことによって、相手である被動作主を焦点化し、主語に立てることができ、そのため、(24)と (25) は、同じ尊敬語を使っているが、(25)の方が相手に対する敬意を一層強く表すことができるからだと考えられる。丁寧さも、命令法と同じように、被動作主主題フォーカスというスندا語の性質から派生した意味であるといえよう。

もちろん、「di-動詞」構文は、基本的に直接受身であるため、語幹となる動詞は他動詞でなければならない。

## 2.2 「di-動詞」構文とモダリティ表現との共起性

スندا語のモダリティは、述語動詞の前に助動詞を置くことによって表される。

- (26) Urang hayang dahar.

私 ～たい 食べる

私は食べたい。

- (27) Urang kudu indit ka sakola.

私 ～しなければならない 行く へ 学校

私は学校へ行かなければならない。

- (28) Maneh meunang balik gancang poe ieu.

あなた ～してもよい 帰る 早い 日 この

あなたは今日早く帰ってもいい。

- (29) Pulisi bisa newak bangsat.

警察 できる 逮捕する 泥棒

警察は泥棒を逮捕することができる。

例 (26) ～ (29) を見てもわかるように、ムードは一般的に subject focus の能動態で表されるが、スندا語では object focus である受動態で表すことも可能である。ここでは、スندا語の「di-動詞」構文とモダリティ表現との共起性について述べる。

### 2.2.1 可能表現

スندا語の可能表現は、述語動詞の前に bisa 助動詞を置くことによって作られる。その助動詞は、能動態の「N-動詞」構文だけでなく、受動態の「di-動詞」構文に置くこともできる。

- (30) Indung urang bisa nyieun kantong tina baju urut.

母 私 できる N-作る 鞆 から 服 中古

母は古着から鞆を作ることができる。

- (31) Baju urut bisa dijieun kantong ku Indung urang.

服 中古 できる *di*-作る 鞆 by 母 私

古着は母によって鞆に作られることができる

→ 古着から鞆を作ることができる。

動作主主題フォーカスの文である(30)では、母は古着から鞆を作ることができるが、他の人はできないかもしれないという意味を表す。一方、被動作主主題フォーカスの文である(31)では、古着からなら鞆を作ることができるが、他の物からだと作れないかもしれないという意味を含意する。

### 2.2.2 義務表現と禁止表現

スندا語の義務表現は、述語動詞の前に *kudu* 助動詞を置くことによって作られる。また、禁止表現は、述語動詞の前に *teu meunang* 若しくは *tong* 助動詞を置くことによって作られる。

- (32) Urang kudu nyeseuh baju.

私 ~ねばならない *N*-洗濯する 服

私は服を洗濯しなければいけない。

- (33) Baju kudu diseseuh (ku urang).

服 ~ねばならない *di*-洗濯する

服は(私に)洗わなければいけない。

→ (私は)服を洗わなければいけない。

- (34) Urang islam teu meunang nginum bir.

イスラム教徒 ~してはいけない *N*-飲む ビール

イスラム教徒はビールを飲んではいけない。

- (35) Bir teu meunang diinum ku urang Islam.

ビール ~してはいけない *dii*-飲む イスラム教徒

ビールはイスラム教徒に飲まれてはいけない。

→ イスラム教徒はビールを飲んではいけない。

- (36) Tong diinum cai teh, kotor!

~するな *di*-飲む 水 汚い

飲まれるな、その水を、汚い。

→ その水を飲むな。汚いぞ。



### 2.2.3 願望表現

スンダ語の願望表現は、述語動詞の前に *hayang* 又は *hoyong* (丁寧) を置くことで作られる。この助動詞も *N*-動詞構文と *di*-動詞構文の両方と共起することができる。

- (37) Bapa hayang mere duit ka si Ujang.  
父 ～したい *N*-与える お金 にウジャング  
父はウジャングにお金を与えたがっている。
- (38) Ujang hayang dibere duit ku bapa.  
ウジャング ～したい *di*-与える お金 by 父  
ウジャングは父にお金を与えられたがる。  
→ ウジャングはお父さんにお金を貰いたがっている。
- (39) Urang hayang meuli buku.  
私 ～したい *N*-買う 本  
私は本を買いたい
- (40) ?Buku hayang dibeuli ku urang.  
本 ～したい *di*-買う by 私  
本は私に買われたがっている。

能動文である例 (37) と受動文である例 (38) は対応しているように見えるが、実際はそうではない。例 (37) では、父がウジャングさんにお金をあげたがっているが、ウジャングさんがもらいたがっているとは限らない。それと同じく、例 (38) では、ウジャングさんがお金をもらいたがっていることは確かだが、父がウジャングさんにお金をあげたがっているとは限らない。つまり、*hayang* という助動詞は文の主語に立つ者の意図性を表すものなので、能動文と受動文で形式的には対応しているように見えても、願望表現の場合は対応しているとは限らない。また、願望表現と共起する「*di*-動詞」構文の主語は有情物でなければならないため、例 (40) は不適格な文になる。

### 2.2.4 難易表現との共起性

スンダ語の難易表現は、述語動詞の前に *babari* (易しい) / *hese* (難しい) を置くことによって表される。述語動詞自体は「*N*-動詞」でも「*di*-動詞」でも可能だが、難易が動作主の能力によって生じるか、被動作主の性質によって生じるかという点で異なる。難易の原因が動作主の能力の場合は「*N*-動詞」構文を使用し、原因が被動作主の性質の場合は「*di*-動詞」構文を使用する。以下の例を見てみよう。

- (41)a. Hese mawana atuh ari gede kitu mah.  
難しい *N*-持って行く ～なら 大きい そのように

そんなに大きいと持ち歩きにくいよ。

b. Hese dibawana atuh ari gede kitu mah.

難しい *di*-持つて行く ～なら 大きい そのように

そんなに大きければ持ち歩かれにくいよ。

→ そんなに大きいと持ち歩きにくいよ。

(42) Microsoft word nu anyar leuwih babari dipake tibatan nu saacanna.

マイクロソフトワード 新しい より 易しい *di*-使う ～に比べると その前の

新しいマイクロソフトワードはその前の（もの）に比べるとより使いやすい。

例（41a）は、他人であればその大きさの荷物を持ち歩くことができるかもしれないが、自分が動作主の場合、その大きさの荷物は運ぶ能力がないから持ち歩くことが困難であるという意味を表している。一方、例（41b）と（42）の難易は、両方とも被動作主の性質によって発生している。（41b）は、動作主が誰であろうが、荷物が大き過ぎるため、持ち歩くことは困難だという意味を表している。（42）は、新しいマイクロソフトワードの性能が以前の版よりよくなったので、利用者にとって使いやすくなったという意味を表している。つまり、難易原因が被動作主であるマイクロソフトワードの性能であるため、「*di*-動詞」構文が用いられている。

### 3. 「*di*-動詞」構文と日本語の「～（ら）れる」との対照

本章では、上で考察してきたスンダ語の受身表現である「*di*-動詞」構文と日本語の「～（ら）れる」の類似点と相違点を明らかにするため、両者を対照して考察する。その前に、日本語の受け身について簡単に触れる。

日本語の受け身文は形態的に「～（ら）れる」によって表現されるが、構文的には直接受け身と間接受け身がある（寺村：1982）。さらに、直接受け身は有情物受け身と非情物受け身、そして間接受け身は所有物受け身（持ち主受け身）と非所有物受け身に下位分類される。例（43）～（47）（影山：2004）を参照。

(43) 花子は太郎に褒められた。（有情物・直接受け身）

(44) 指輪が泥棒に盗まれた。（非情物・直接受け身）

(45) 花子は太郎に頭を叩かれた。（所有物受け身／持ち主受け身）

(46) 花子は先生に作文を褒められた。（所有物受け身／持ち主受け身）

(47) 太郎は近くの音大生に一晩中ピアノを弾かれた。（非所有物受け身）

意味の観点からみると、直接受け身と所有物受け身は中立と利害の意味を表すが（例（43）（44）（45）（46））、非所有物受け身文は主に被害の意味を表す（例（47））とされている。

### 3.1 情報構造の違いについての対照

2.1.1 で述べたように、談話レベルにおいて、スンダ語の「di-動詞」構文によって伝達される情報は旧情報であるため、「di-動詞」構文は談話の冒頭には出にくい傾向があり、通常、聞き手に新情報を伝達するためには「N-動詞」構文が用いられる。一方、日本語の情報構造は「ハ」の主題マーカーによって区別されると言われている。これについて、佐久間（2006：93）は、構造上、旧情報は文の主題として出現し、「ハ」主題マーカーによってマークされ、その旧情報に付け加えられた新情報は、主題に対する評言として「ハ」の後ろに現れるとしている。そして、日本語では、主題が「ハ」副助詞によってマークされる一方、情報の新旧の区別は文脈の流れの中でその都度決定されるということにも言及している。それでは、談話レベルにおいて、日本語の情報構造はどのようになっているのだろうか。それを明らかにするために以下の例を観察しよう。この例の話題は「学費」であるが、その「学費」という情報が両言語の談話レベルにおいてどのように出現するかを見てみよう。

(48) Kahar mindeng elat mayar iuran sakola, ku kuring sok

カハル しばしば 遅れる N-払う 学費 に 私

dipangnalangankeun. (Aam Amilia, 2008:30)

di-救済してあげる

カハルはしばしば学費を遅れて払った、私によってよく払ってあげられた。

→ カハルはしばしば学費を滞納していたが、(その時) 私はよく(それを)払ってあげていた。

例を見て分かるように、スンダ語の場合、冒頭で新しい情報として出現した「学費」は、能動文である「N-動詞」構文で、「払う」という述語動詞の直接目的語として表されている。それに対して、次の文では「学費」という新情報が旧情報になり、受動文である「di-構文」の主語として表されている。一方、日本語の訳を見ると、冒頭でも次の文でも能動文で、述語動詞の目的語になっている。このような両者の違いは有生性と深く関係していると考えられる。スンダ語の場合は、有生性の程度に関係なく、どんな名詞でも比較的自由に文の主語として現れることができる。それに対して日本語は、ある文の中で有生性の高い名詞の方が主語になりやすいとされる。そのため、スンダ語では、有生性が低い名詞でも、最初の文で目的語だった新情報を次の文では主語として受け身文によって表すことができるが、日本語の場合は主語になりにくく、次の文において旧情報として現れる時も、能動文の目的語として現れることになる。

### 3.2 意味と機能についての対照

- |      | スンダ語の「di-動詞」構文  | 日本語の「～（ら）れる」                      |
|------|---|-----------------------------------|
| (49) | Urang ditenggeul ku Budi.<br>私 di-殴る に ブディ<br>私はブディに殴られた。   | ⇒ 私はブディに殴られた。                     |
| (50) | Budi dipuji ku indungna.<br>ブディ di-褒める に 母親<br>ブディは母親に褒められた。  | ⇒ ブディは母親に褒められた。                   |
| (51) | Buku urang diinjeum ku Budi.<br>本 私 di-借りる に ブディ<br>私の本はブディに借りられた。                                      | ⇒ ? 私の本はブディに借りられた。                |
| (52) | Yayasan rancage didirikeun taun<br>財団 ランチャゲ di-設立する 年<br>1980.<br>1980<br>ランチャゲ財団は 1980 年に<br>設立された。    | ⇒ ランチャゲ財団は 1980 年に<br>設立された。      |
| (53) | Urang dipangmeulikeun kantong ku<br>私 di-買ってあげる 鞆 に<br>bapa<br>父<br>私は父に鞆を買ってあげられた。<br>→ 私は父に鞆を買ってもらった。 | ⇒ * 私は父に鞆を買われた。<br>私は父に鞆を買ってもらった。 |
| (54) | Ibu diantosan ku Bapa di<br>あなた（女性） di-待つ 彼（丁寧） で<br>kantor.<br>オフィス<br>あなたは彼にオフィスで待たれて<br>いる。          | ⇒ * あなたは彼によって待たれて<br>いる。          |
| (55) | Baju teh diseuseuh atuh<br>服 間投詞 di-洗う 間投詞<br>服は洗われろ。<br>→ 服を洗え。  | ⇒ * 服は洗われろ。                       |

(56) Si Budi sapatuna dipaok di masjid.

ブディ 靴-彼の di-盗む で モスク

ブディは彼の靴をモスクで盗まれた。⇔ ブディはモスクで靴を盗まれた。

→ ブディはモスクで靴を盗まれた。

上で見たように、スンダ語では、有情物とともに非情物も受身文の主語になりうる。一方日本語では、有生性が高い方が主語になりやすいという傾向があるため、(52) のように何らかの特徴付けがなければ、非情物は主語になりにくい。そのため、スンダ語の (49) ～ (52) の例のうち、日本語と意味的に一致して対応しているのは例 (49) と (50) のみとなる。例 (51) は、構文的には対応しているが、意味的には異なっている。なぜなら、スンダ語の文は中立の意味を表すのに対して、日本語の文は被害を表すと考えられるからである。

また、スンダ語と日本語の受け身は中立と利害の意味を表す点では共通しているが、日本語と違って、スンダ語の受け身文は、例 (54) と (55) のように、命令法と丁寧さという派生的な意味を表すことができる。確かに日本語でも、「～られる」助動詞が尊敬語として用いられるが、尊敬語は常に能動文の構造で用いられるので、受動文の「～られる」とは違う。そのため、例 (54) の日本語の文は、尊敬の意味を表すこともできないし、受け身文としても不適格と考えられる。たとえ、無理に受け身文として解釈しても、その意味は尊敬とは真逆で、被害の意味を表すことになる。一方スンダ語には、日本語の謙譲語と尊敬語のような敬語が他動詞と自動詞の両方に存在するが、他動詞の場合、能動文で用いるより、「di-動詞」構文を使って受け身文として表現した方が相手に対する敬意が増す。

スンダ語の「di-構文」は命令法として用いることができるのに対して、日本語の命令法は基本的に能動態で表す。確かに、日本語でも受け身文を用いた命令文が見られるが、語用論の観点から見ると、両者の違いは明確である。

(57) 被害者の親のところに行って被害者にしたようなこと私にもしていいですって言って殺されろ。

(58) じゃあ自分は割れたビンで顔を切られろともでも言うのですか。

(59) 男なら黙って殴られろ。

(60) そのまま殴られろと普段はっています。エホバの教えでは、暴力は禁止されています。

例 (57) ～ (60) は形式的には受け身文であり、命令法を表している。しかし、『相手に実際にある事柄をやってもらう』という意味を表すスンダ語の例 (55) とは違って、日本語の例はいずれも、『実際に相手にやってもらう』可能性はきわめて低い。つまり、例 (57) ～ (60) でわかるように、日本語の受け身文による命令法は、語用論上、相手に対して不

満をぶつけて批判をしたり、相手に迷惑を甘んじて受けてほしいという意味を表したりしている。

そして例（53）を見るとわかるように、受益を表すスンダ語の「di-pang-動詞-keun」構文は、日本語の「～（ら）れる」とは対応せず、むしろ意味的に日本語の授受表現である「～てもらう」に対応すると考えられる。

最後に、例（56）では、スンダ語の文は、所有物受け身と言われる日本語の文と意味的にも構文的にも対応していることがわかった。スンダ語の文と日本語の文の両方で、主語と動作主の働きかけの対象となる目的語の間に所有関係が成立する。そのため、動作主が起こした行為が直接、主語に向けられたものでなくても、その影響は主語まで及んでいると考えられる。このようにスンダ語でも、主語の位置に立つのは第三人称でなければならないという条件と働きかけの対象となる名詞句の後ろに第三人称の所有格を表す「-na」を付けるという条件さえ満たせば、そのような構造の受け身文を生産的に作ることができる。

### 3.3 他のさまざまな表現との共起性についての対照

2.2 で述べたように、スンダ語の「di-構文」は、モダリティ表現や願望表現などのさまざまな表現と共に自由に用いられる。それに対して、例（30）～（42）の日本語の訳を見ればわかるように、その殆どは「～（ら）れる」構文と対応せずに、日本語では能動文で表すのが一般的である。その要因は、両者の項の特徴の違いにあると思われる。スンダ語の名詞は、有生性の程度と関係なく、文の主語として出現することができるのに対して、日本語の場合は、有生性の低い非情物に比べて、人間などのような有生性の高い名詞の方が動作主として主語の位置に現れやすい。そのような事実は、日常的な言語使用において、日本語の受身文に比べてスンダ語の受身文の使用率が高い要因だと考えられる<sup>8</sup>。

---

<sup>8</sup> Inu (2012:344~351)を参照

## 第1章のまとめ

以上、スンダ語の「di-動詞」構文と日本語の「～（ら）れる」を対照して、分析を行った。本章の議論をまとめると、以下のようになる。

スンダ語の「di-動詞」構文は形態的な意味と派生的な意味を有する。形態的な意味は被害と中立と受益に分けられる。一方、派生的な意味は命令法と指令法と丁寧さである。その他に、スンダ語の「di-動詞」構文は、可能表現、義務表現と禁止表現、そして願望表現のようなモダリティ表現や難易表現と共起することができる。そのため、スンダ語の日常的運用において、「di-動詞」構文の使用頻度は非常に高い。その原因は、情報伝達の仕組みの特徴にあると考えられる。スンダ語には、動作主主題フォーカス、被動作主主題フォーカス、そして動作主題フォーカスというものがある。それによって、スンダ語では、アニマシー（有生性）に関係なく、有情物でも非情物でも、フォーカスとして簡単に主語に立つことができる。

一方、日本語の「～（ら）れる」構文は、意味的に中立と利害を表すという点では共通しているが、この構文はスンダ語と違って、派生的な意味がない。日本語の「～（ら）れる」構文は、スンダ語の「di-動詞」構文のようにモダリティ表現や難易表現とは共起しにくいと考えられる。その主な原因は、日本語では有生性が高い方が主語になりやすいという傾向があるため、何らかの特徴付けがなければ、非情物は主語になりにくいからだと考えられる。

また、「di-動詞」構文の一種として、被動作主が事象によって受益する意味を表す「di-pang 動詞 keun」という構文がある。しかし、この構文は、構造的に受身文であるにもかかわらず、日本語の「～（ら）れる」構文とは対応せず、「～てもらう・～ていただく」といった授受表現と対応している。

## 第2章 スندا語の「ka-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」との対照研究

### 1. はじめに

スندا語の受身表現には、「di-動詞」構文の他、「ka-動詞」構文もある。両者の相違点について、従来、スندا語学者は、ある事象が意図的に行われるか、非意図的に行われるかの点で異なっていると指摘してきた。「di-動詞」構文は意図的な行為を表すのに対して、「ka-動詞」構文は非意図的な行為を表すとされている (Coolsma 1985, Budi 1996, Franz Muller-Gotama 2001)。さらに、Franz Muller-Gotama (2001) は、「ka-動詞」構文が表す事象は偶発的に起きるとも指摘した。以下の例を見てみよう。

- (1) Si Ujang katenggeul ku si Budi.

ウジャング ka-殴る に ブディ

ウジャングはブディに殴られた (非意図的)。

- (2) Rahmad kaheumpikan sapedah.

ラフマッド ka-押さえつける-an 自転車

ラフマッドは自転車に押さえつけられた。

- (3) Awakna katincakan ku jelema nu pabaliut hayang ninggali kanjeng raja

体-na ka-踏む-an に 人 賑わう ～たい 見る 殿 国王

sumping.

来る

彼の体は国王殿が来るのを見たくて賑わっている人々に踏まれていた。

例 (1) は、ブディが働きかけた客体はウジャング以外の第三者だが、その客体が、ブディが殴るのを避けたり、あるいはブディが狙いを外したりしたため、偶然その場にいるウジャングに当たってしまったという意味を表している。次に、例 (2) では、ラフマッドさんは何らかの理由で倒れた自転車に押さえつけられて、その自転車の下敷きになったという意味を表している。最後に、例 (3) の主語は賑わう人々に踏まれてしまった。上記の例から分かるように、「ka-動詞」構文で表された事象は、非意図的、あるいは偶発的に起きてしまい、そして主語に立つ被動作主に被害を与えてしまうという意味を表している。しかし、日常の言語運用を観察してみると、受身用法の他に、「ka-動詞」構文は様々な用法で用いられている。以下の例を見てみよう。

- (4) Tulisan leutik kitu mah moal kabaca atuh!

書き物 小さい そのよう 否定詞 (未来) ka-読む

そのような小さな書き物は読まれることができないだろう。



→ あのような小さい文字だと読めないだろう。

- (5) Hate nu tadina Liwung, karasa reeus.

心 関係代名詞元々 悩む ka-感じる 幸せ

元々悩んでいた心が幸せと感じられた。

→悩んでいた心が幸せに感じた／幸せになった。

(4) と (5) は両方「ka-動詞」構文を用いた受け身文であるが、それぞれ可能と自発の意味を表す。また、(1) ～ (4) の述語動詞の語幹は他動詞であるのに対して、(5) の述語動詞の語幹 *rasa* 「感じる」は自動詞である。*Rasa* 「感じる」以外に、スンダ語の「ka-動詞」構文は、「雨が降る」や「風が吹く」のような自動詞からでも形成することができる。

- (6) Ujang kahujanan.

ウジャング ka-雨が降る-an

ウジャングは雨に降られた。

- (7) Ujang katangan tamu.

ウジャング ka-来る-an 客

ウジャングは客に來られた。

- (8) \*Ujang kamaotan anakna.

ウジャング ka-死ぬ-an 子供-na

ウジャングは子供に死なれた(非文)。”

(6) の例 *kahujanan* 「(雨に降られる)」と (7) の例 *katangan* 「(來られる)」は、いずれも日本語の訳とよく対応し、日本語の間接受け身とほぼ類似している。(7) の例は多義的で、一つは、客が来ることはウジャングさんにとって望ましくないという意味を表している。もう一つの意味は、現在ウジャングさんの所に客が来ているという状態を表している。一方、(8) の例は、形態的に(6)と(7)の例と同じく「ka-動詞-an」の形をとっており、日本語の訳のような意味を表すはずである。ところが、実際はそのような意味を表すために用いられることはない。このように、「ka-動詞」構文は非意図的受け身だと一概には言えない。「ka-動詞」構文には、受身用法の他、可能、自発、そして結果状態の陳述もしくは受動完了の用法があり、これらの用法はそれぞれ異なる成立条件を持っていると思われる。本章では、「ka-動詞」構文の意味的、形態的、そして構文的な特徴を探り、「ka-動詞」構文のさまざまな用法の成立条件を中心に分析を試みる。

## 2. 非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文の特徴について

本節では、非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文の特徴を形態的、意味的、そして構文的な特徴にわけて分析する。さらに、構文的な特徴を、能動文との関係、「ka-動詞」構文

の主語、そして「ka-動詞」構文の動作主に分けて分析を行う。その後、それらの特徴に基づいて、非意図的受け身用法としての「ka-動詞」構文の成立条件を考える。

## 2.1 形態的な特徴

Coolsma (1985)は「ka-動詞」構文を第二受け身文と呼んでいる。彼は、「ka-動詞」構文の語幹になり得るのは第一クラス他動詞、第二クラス他動詞と第三クラス他動詞であると指摘している。第一クラス他動詞は基本他動詞、第二クラス他動詞は「語幹-an」派生他動詞、そして第三クラス他動詞は「語幹-keun」派生他動詞である。これについて Frans Muller-Gotama (2001) は、スンダ語の受身文は他動詞からしか形成することができず、意図的な行為を表す場合は動詞に「di-」接頭辞がつけられ、非意図的な行為を表す場合は動詞に「ka-」接頭辞もしくは「ka- -an」接周辞が付けられると述べている。両者は、「ka-動詞」構文は他動詞からしか作れないという点では共通しているが、第三クラス動詞の「語幹-keun」が語幹に成りうるかどうかという点で意見が異なっている。この違いを明らかにするために、それぞれの動詞について形態的、意味的な観点から述べることにする。

まず、第一クラス他動詞とは基本他動詞のことで、これらの動詞は、接辞がなくても二つの項を持つ他動詞と見なされる。例えば *baca*「読む」、*beuli*「買う」などである<sup>9</sup>。次に、第二クラス他動詞と呼ばれる「語幹-an」について簡略に述べる。「-an」接頭辞は、それが付く語幹によって異なる意味を表す。語幹が基本動詞の場合は反復を表すのに対して、自動詞や名詞に付く場合は派生他動詞を構成する。また、自動詞に付く場合、「二格を取る目的語」のマーカ―としての機能を担い、名詞に付く場合は、「～に語幹の名詞を与える」という意味を表す。例えば、*diuk* (座る) -an 「～に座る」、*parab* (餌) -an 「～に餌を与える」などである。最後に、第三クラスの動詞は「語幹-keun」の構成を持つ動詞をいう。「-keun」接頭辞は使役化の機能を持ち、基本的に、基本他動詞、自動詞、そして形容詞に付けられる。基本動詞に付く場合は直接目的語のマーカ―としての機能を担い、自動詞と形容詞に付く場合は派生他動詞を形成し、「～させる」という意味を表す。例えば、*tulis* (書く) -keun 「～を書く」、*lumpat* (走る) -an 「～を走らせる」、*panas* (熱い) -keun 「熱くさせる／加熱する」などである。

- 例： a. *baca* → *kabaca*  
読む (非意図的に) 読まれる  
b. *diukan* → *kadiukan*  
(～に)座る (非意図的に) 座られる

---

<sup>9</sup> スンダ語では、文中の動詞に常に態を表す接辞が付いている。

c. *lumpatkeun* → *kalumpatkeun*

走らせる (非意図的に) 走らせられる

以上、「ka-動詞」受身文に変換できる動詞が3種類あることを確認した。確かに単語のレベルでは、すべて文法的に変換できるように見えるが、果たして実際の文の中に現れる場合、すべて非意図的受身用法として成立するのだろうか。以下の例を見てみよう。

(9) *Sigana buku teh kabawa ku Ujang.*

～ようだ 本 ka-持っていく に ウジャング

その本はウジャングに持っていくかれたようだ (非意図的受身)。

(10) *?Buku kabeuli ku Ujang.*

本 ka-買う に ウジャング

本はウジャングによって買える。

→ウジャングは(その)本が買える(可能)。

(9) と (10) の例は同じ構造で、さらに同じ種類の述語動詞を持っているが、(9) は非意図的受け身として解釈されるのに対して、(10) の例は一般的に非意図的受け身としては解釈されず、可能用法と解釈される。つまり、非意図的受身の「ka-動詞」構文の成立には、動詞の制約以外に、他の成立条件を満たさなければならないと思われる。

## 2.2 非意図的受け身の「ka-動詞」構文の意味的な特徴について

非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文は、基本的に文の焦点を働きかきの対象において、ある事象が非意図的に行われるという意味を表す。つまり、動作主が狙いとした対象とは別の対象に非意図的に働きかけてしまうという意味を表す。そのため、被動作主の立場から見ると、利害の意味が現れやすいと考えられる。とはいえ、文脈によっては、動作主が自ら非意図的に起こした事象の望ましくない影響、あるいは損を被るという意味を表す場合もある。さらに、「ka-動詞」構文を用いることによって、動作主が起こした事象が被動作主に望ましくない影響を与えていても、行為自体は非意図的に行われたため、動作主としての責任が軽減されているということが表わされているとも考えられる。これらの意味の成立は、動作主の意図性の有無に関する話し手と動作主の認識によって大きく左右されられると思われる。以下の例を見てみよう。

(11) *?Gara-gara telat ka toko, jadi we buku teh kaburu kabeuli ku Ujang.*

～せいで 遅れる へ 店、 そのため 本 先に ka-買う に ウジャング

遅れて店へ行ったせいで、本がウジャングに先に買われた。

(12) *A: Naonnya ieu ? asa teu meuli urang mah.*

何 これ 思う 否定詞 買う 私

何これ、買った記憶がないな。

B: Kabeuli mereun kamari.

*ka*-買う たぶん 昨日

昨日、(それが) 買われてしまったかも知れない。

(13) Buku kadiukan ku Ujang.

本 *ka*-座る-*an* に ウジャング

本はウジャングに座られた。

(14) Buku jadi rikes gara-gara kadiukan ku Ujang.

本 なる みすぼらしい ~せいで *ka*-座る-*an* に ウジャング

本はウジャングに座られたせいでみすぼらしくなってしまった。

(15) ?Korsina kadiukan ku batur, jadi we teu bisa diuk!

椅子 *ka*-座る-*an* に 他の人 そのため 否定詞 できる 座る

椅子が他人に座られたため、(私は) 座ることができなくなった。

(16) Lantaran unggal isuk leumpang ka stasiun, awak jadi kaolahragakeun.

~だから 毎 朝 歩く ~ 駅 体 なる *ka*-運動する-*keun*

毎朝駅へ歩くことによって、体が無意識的に運動させられるようになった。

→ 毎朝駅へ歩くため、運動するようになった。

まず、(11) と (12) の例を分析してみよう。これらの例は同じ述語動詞を持っているが、非意図的受け身として認められるのは例 (12) のみである。「*ka*-動詞」は常に動作主が問題になる。しかし、例 (11) の例の場合、話し手には、第三者のウジャングが意図的に本を買うかどうかを判断するために必要な共有知識がない。そのため、(11) の場合は、「*ka*-動詞」構文より「*di*-動詞」構文を用いた方が適切である。一方、(12) の場合、動作主の A と話し手の B の間には、A が話題のものをかうつもりがないという意図性の有無に関する共有知識があるため、非意図的な受け身用法が成立し、A がかうつもりがないものを買ってしまったため損をした、という意味を表している。次に、例 (13) (14) を見てみよう。

(13) と (14) が成立する理由は、(13) と (14) の話し手が、動作主は本の上に座るつもりはないということについて共有知識を持っている、あるいは、本の上には意図的に座らないだろうという一般的な知識を持っているからだと思われる。また、(13) の例では、どのように被害を受けたかということが文中には具体的に述べられていないが、「*ka*-動詞」構文を使うことによって、ウジャングが本の上に非意図的に座ったことで話し手が何らの被害を受けた、あるいは、本が破れてしまうといった被害があったことが読み取れる。それに対して(14)の例では、座られてみすぼしくなった本を見て、話し手が迷惑を受けているということが、具体的に文中で表わされている。例 (15) は、(13) (14) と同じ述語

動詞を持っているが、例 (11) と同じ理由で非意図的な受け身と認めることはできず、「di-動詞」構文を用いた方が適切であると考えられる。

最後に、例 (16) でも非意図的な受け身用法が成立し、話し手は進んで運動するつもりはないが、毎日駅まで歩くことが原因で体が運動させられ、恩恵を受けたという意味を表している。なお、動作主が原因の場合、「ka-動詞」構文は「*jadi* “～になる”」という動詞と一緒に用いられるのが普通である。

## 2.3 非意図的な受け身用法の「ka-動詞」構文の構文的な特徴について

本節では、構文的な特徴を三つに分ける。まず、2.3.1 では能動文との関係について論じる。次に、2.3.2 と 2.3.3 では、それぞれ主語の特徴と動作主の特徴について考察する。

### 2.3.1 非意図的な受け身用法の「ka-動詞」構文と能動文の関係

これまで、「ka-」構文には対応する能動文がないと論じられてきたが、その理由として「非意図性」という要因があげられている。確かに、対応する「*N-*」能動構文をそのまま使うと、「非意図性」という要素が表れにくい。が、*teu kahaja* 「わざとじゃない」という副詞を文中に取り入れるとどうなるだろうか。本節ではそれを確かめるために、非意図的な受け身用法の「ka-動詞」構文に対応し得る能動文に *teu kahaja* 「わざとじゃない」という副詞を入れ、形成された能動文が各「ka-動詞」構文と意味的に対応するか確認した。その結果、（原因、あるいは意図性のない非情物が動作主である場合を除き）「動作主が自ら起こした事象には意図性がない」という意味を表す非意図的な受け身用法の「ka-動詞」構文は、*teu kahaja* 「わざとじゃない」という副詞を取り入れた「*N-*」構文と対応していることが分かった（以下の例を参照）。

(17a) *Manehna teu kahaja maca buku kuring.*

彼は わざとじゃない *N-*読む 本 私

彼／彼女はわざとではなく私の本を読んでしまった。

↓

(17b) *Buku kuring kabaca ku manehna.*

本 私 *ka-*読む に 彼／彼女

私の本は彼（彼女）に読まれた（非意図的）。

(18a) *Urang teu ngahaja nincak suku si Ujang.*

私は わざとじゃない *N-*踏む 足 ウジャング

私はわざとではなくウジャングさんの足を踏んでしまった。

↓

(18b) Suku si Ujang *katincak* ku urang.

足 ウジャング ka-+踏む に 私

ウジャングさんの足は私に踏まれてしまった（非意図的）。

### 2.3.2 非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文の主語について

非意図的受身を表す「ka-動詞」構文の主語は意図的受身用法の「di-動詞」構文と同じく、一般的には被動作主の意味役割を担い、動作主による動作を受ける客体である。その主語は有情物と非情物に分けられるが、スダ語では動作主主題フォーカスと被動作主主題フォーカスがあるため、動作を受ける客体になりやすい非情物でも、「di-動詞」構文の中で容易に文の主語になることができる<sup>10</sup>。そのため、非情物と有情物は、有生性の差に関係なく同じような比率で「ka-動詞」構文の主語になることができる。受身文の意味と主語の関係について、許（2004:33）は次のように述べている。受身文の主語が有情物である場合、利害とは関係のない主語の変化を表すこともあるが、主語の利害関係を表す受身文が多い。しかし、「ka-動詞」構文の主語は、元々動作主が行為を向けた対象ではなく、何らかの理由で本来の対象の代わりに偶発的に動作の客体になってしまった。つまり、本来事象の影響を受けるはずがないものが、直接的に影響を受けることになったため、「ka-動詞」構文は、主語が有情物であるか非情物であるかに関係なく、「利害」の意味を表しやすいと考えられる。ただし、主語が有情物である場合、利害を受けるのは主語であるのに対して、主語が非情物の場合、利害を受けるのは話し手、もしくは主語と所有関係を持つ有情物になる。以下の例を見てみよう。

(19) Ujang kabawa nepi ka Banjaran.

ウジャング ka-持っていく まで バンジャラン

ウジャングはバンジャランまで持っていかれてしまった。

→ ウジャングはバンジャランまで連れていかれてしまった。

(20) Sigana buku teh kabawa ku Ujang.

～ようだ 本 ka-持って行く に ウジャング

その本はウジャングに持って行かれたようだ（非意図的受身）。（再掲）

例（19）は、ウジャングがとあるミニバスに乗っていて、目的地ではない場所に連れて行かれてしまった、という意味を表す。つまり、ミニバスの運転手も意図的にウジャングをバンジャランまで連れていくつもりはなく、ただ何らかの理由で、ウジャングの目的地

<sup>10</sup> 動作主主題フォーカスは動作主を主題化し、動作の主体の視点から出来事を陳述する能動文のことをいう。一方、被動作主主題フォーカスは、被動作主を主題化し、動作の客体の視点から出来事を陳述する受動態のことをいう。

を知らないまま乗せていた、という意味になる。一方、例(20)は、ウジャングが非意図的に本を持っていつてしまったので、話し手が何らかの被害を受けている、もしくは迷惑するという意味を表している。

### 2.3.3 非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文の動作主について

動作主の観点から考えると、非意図的受身用法の「ka-動詞」構文は意図的受身である「di-動詞」構文に比べて、より幅広い動作主の選択肢を持っている。その理由は、「di-動詞」構文は事象が意図的に行われるため、動作の主体に成りうるのは意図性を有する有情物、もしくは有情物に力を加えられて事象を起こす無生物に限られる一方、「ka-動詞」構文が表す行為は非意図的に行われるため、意図性のない非情物でも動作主になり得るからである。そのため、「ka-動詞」構文の動作主は、行為を行う行為者そのものだけではなく、原因を指すこともできる。

動作主が行為者である場合は「ku “によって “」動作主マーカーでマークされる。一方、動作主が原因である場合は「*lantaran* ” ～だから “」によってマークされる。

また、ある事象が「ka-動詞」構文を用いて表現される場合、事象を起こした動作主の存在が前提とされるが、常に文中に明示されるとは限らない。動作主が文中には明示されず、背景化される場合も多々ある。特に動作主が動作を行う行為者の場合である。一方、意図性のない非情物や原因が動作主の場合、基本的に省略することはできない。

- (21) Panto katutupkeun ku angin.

ドア ka-閉める-keun に 風

ドアが風に閉められた。

- (22) Beja yen urang rek kawin deui teh kadenge ku pamajikan, jadi weh ngamuk…!

情報 という 私 結婚する 再び ka-聞く に 妻 そのため 怒る

私が再び結婚するという情報が妻に(非意図的に)聞かれたので、怒ってしまった。

→ 私が再び結婚するという情報が妻の耳に入ったので、(彼女は)怒ってしまった。

- (23) Ari mindeng olahraga mah, pan jadi kalatih awak teh.

もし 頻繁に 運動する なる ka-鍛える 体

頻繁に運動したら、体が無意志的に鍛えられるようになったでしょう。

→ よく運動したら、体が鍛えられるようになったでしょう。

### 2.4 非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文の成立条件について

以上、第二節で非意図的受身用法の「ka-動詞」構文のさまざまな特徴を分析した。本節では、それらの特徴に基づいて、非意図的受身用法の「ka-動詞」構文の成立条件を整理す

る。

非意図的受身用法の「ka-動詞」構文の成立条件は以下のようである。

第一条件 非意図的受身用法の「ka-動詞」構文は他動詞からしか構成することができない。

また、他動詞の中でも、「ka-動詞」構文に変換できるのは基本他動詞と「語幹-an」派生動詞のみである。

第二条件 話し手と動作主が、動作主がある行為を行う際に意図的かどうかという、動作主の意図性の有無に関して共有知識を持っていなければならない。

第三条件 (原因、あるいは意図性のない非情物が動作主である場合を除いて)「動作主が自ら起こした事象には意図性がない」という意味を表す非意図的受身用法の「ka-動詞」構文は、「teu kahaja “無意識的に”」という副詞を含む「N-」構文と対応しなければならない。

第四条件 非情物であるか有情物であるかを問わずに、特定の主語と動作主が存在する。

### 3. 結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文の意味的な特徴について

本節では、結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文について、形態的、意味的、そして構文的な特徴の観点から分析を行う。その後、それらの特徴に基づいて結果状態の陳述/受動完了用法の「ka-動詞」構文の成立条件を示す。

#### 3.1 結果状態の陳述/受動完了用法の「ka-動詞」構文の形態的な特徴について

前述したように、今までスンダ語学者たちは「ka-動詞」構文の用法について非意図的受身用法であるとしてきた。また、その用法の形態的な特徴にしか注目してこなかった。そのため、「ka-動詞」構文は別の用法として用いられる場合、どのような動詞と共起するかについては未だ明らかではない。以下の例を見てみよう。

(24) Panto imahna katutup .

ドア 家 第三人称の所有格 ka-閉める  
彼/彼女のドアは閉められている (閉めてある)。

(25) Sakapeung sok aya jalan anu katutupan ku taneuh urug.

時々 ある 道 関係代名詞 ka-閉める-an 土砂崩れ  
時々、崩れた土で覆われている (覆ってある) 道もある。

(26) Ngaran urang katulis dina akte jual beuli tanah.

名前 私 ka-書く に 証明書 売買 土地  
私の名前は土地の売買証明書に書かれている (書いてある/記されてある)。

(27) Bapa balik ti pagawean teh kasampakkeun budak keur ceurik.



父 帰る から 仕事 ka-用意する 子供 泣いている

父は仕事から帰って、泣いている子供を用意された。

→ 父が仕事から帰ってくると、子供が泣いていた。

(28) ?Buku carita kabaca.

本 物語 ka-読む

?本が読んである。

(29) Buku kadiukan ku Ujang

本 ka-座る-an に ウジャング

本はウジャングに座られた。(再掲)

(30) Hp urang kapuragkeun ku budak.

携帯 私 ka-落ちる-keun に 子供

携帯が子供に(非意図的に)落とされた。

例(24)～(30)では、それぞれの日本語の訳を見れば分かるように、全て、受動態で表された事柄が既に終わり、結果状態を表している。例(24)と(26)では、*tutup*「閉める」と*tulis*「書く」という第一クラス他動詞がka-接頭辞を付加され、それぞれ「閉めである」と「書いてある」という結果状態の意味を表す。例(25)では、*nutupan*「覆う」という第二クラス他動詞がka-接頭辞を付加され、*katutupan*「覆ってある」状態を表す。例(27)では、*sampakkeun*「用意する」という第三クラス他動詞がka-接頭辞を付加され、「用意してある」という状態を表す。一方、例(28)～(30)は、例(24)～(27)と同じように、ka-接頭辞がそれぞれ第一クラス他動詞の *baca*「読む」、第二クラス他動詞の*diukan*「～に座る」、そして第三クラスの*puragkeun*「～を落とす」に付加されてはいるが、いずれも状態の意味を表すことはできない。例(28)には主語の「本」と*kabaca*「ka-読む」という動詞述語があるが、「本は読んである」という解釈にはならない。可能な解釈があるとすれば「非意図的に読まれてしまった」という非意図的受け身、あるいは「読むことができる」という可能動詞としての解釈になる。しかし、後者の二つの解釈を可能にするには、特定の動作主が必要である。そのため、例(28)は基本的に不適格文であると考えられる。例(29)と(30)は、日本語の訳を見ればわかるように、いずれも結果状態の陳述ではなく、ある事象がどのように、そして誰によって行われたかという過程に注目していると思われる。つまり、同じクラスの動詞であっても、結果状態の陳述用法として用いられる「ka-動詞」構文には、非意図的受け身用法に比べて、より厳密な動詞の制約があり、その制約は各動詞が有する性質に深く関連していると考えられる。それを明確にするために、上記の例文で使われている動詞をクラスごとに比較し、分析してみよう。

まず、例 (24) (26) (28) を検証しよう。これらの例は、第一クラス他動詞として *tutup* 「閉める」、*tulis* 「書く」、そして *baca* 「読む」を含んでいるが、最初の二つの動詞が結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文の語幹になり得るのに対し、最後の動詞は語幹になることができない。その理由は、*tutup* 「閉める」と *tulis* 「書く」の場合、物理的に残存する動作の結果が含意されているのに対して、*baca* 「読む」は動作の結果の状態の意味を語彙的に含意していないからだと考えられる。「閉める」と「書く」の場合、それぞれの動作の結果として「閉めてある状態」と「書いた物」が物理的に残存する一方、「読む」の動作結果は物理的に残存しない。

次に、例 (25) (29) の動詞述語を分析しよう。例 (25) (29) の動詞述語の語幹は、それぞれ *tutupan* 「～に～を覆う」と *diukan* 「～に座る」という第二クラス他動詞であるが、*tutupan* 「～に～を覆う」は、その動作の結果として「～が～に覆われている（覆っている）」状態が語彙的に含意されるのに対して、*diukan* 「～に座る」はそういった結果の状態の意味を含意しない。そのため、*ka-tutupan* は結果の陳述用法として容認できるが、*ka-diukan* を同じ用法で容認することはできない。

最後に、例 (27) (30) も、上と同じ理由で、一方は結果結果状態の陳述用法として解釈可能だが、他方は非意図的受け身用法としてしか解釈できないと考えられる。*Sampakkeun* 「用意する」という動作は、結果として「用意された物」が物理的に残るが、*puragkeun* 「落とす」という動作は、必ずしも結果として何かを残すとは限らない。

上記をまとめると、結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文の語幹となり得る動詞は、第一クラス他動詞、第二クラス他動詞、そして第三クラス他動詞を問わず、語彙的に動作の結果の状態を含意していなければならない。

### 3.2 結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文の意味的な特徴

結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文は、ある動作が完了した後、動作の働きかけの対象となるものが動作の結果として現在どのような状態にあるかという意味を表す。つまり、動作主もしくは原因となるものが、（意図性の有無と関係なく）対象となるものに働きかけをし、それによって対象物の状態が変化し、そしてその状態変化の結果が物理的に視覚できたり存続したりするという意味を表す。

＜行為・働きかけ＞ → ＜変化＞ → ＜結果＞ → ＜結果状態＞  
*N*-動詞                      *di*-動詞／*ka*-動詞                      *ka*-動詞／自動詞

上を見ればわかるように、行為の部分は能動文の「*N*-動詞」構文によって表現され、対

象物が働きかけを受ける部分の変化と結果は「*di*-動詞」受動文、もしくは非意図的受動文の「*ka*-動詞」構文で表現される。最後に、結果状態の存続の部分は結果状態の陳述用法の「*ka*-動詞」構文、あるいは結果状態の意味を持つ自動詞によって表される。例えば、*peupeus*「割れる」、*beulah*「砕ける」などである。以下の具体例を見てみよう。

- (31) Salila kompetisi perserikatan, Persib kacatet kungsi jadi  
 間 コンペティション リーグ ペルシブ *ka*-記録する 機能語 なる  
 jawara opat kali nyaéta dina warsih 1961, 1986, 1990, jeung 1995.  
 優勝者 4 回 即ち に 年 1961 1986 1990 と 1995  
 リーグのコンペティションが開催されてから今までの間に、ペルシブは1961、1986、1990、そして1995年の4回にわたって優勝したことがあると記録されている。
- (32) Barudak Jepang atoheun pisan emberna kaeusian cai.  
 子供 日本 喜ぶ とても バケツ *ka*-入れる 水  
 日本の子供たちは、バケツに水が入っているからとても喜んでいる。
- (33) Eweuh rusiah anu kasumputkeun.  
 ない 秘密 関係代名詞 *ka*-隠す  
 隠されている秘密はない。
- (34) 5 imah kaduruk di desa Leuwigoong.  
 5 家 *ka*-燃やす に 村 Leuwigoong  
 Leuwigoong 村で5軒の住宅が燃やされた。  
 → Leuwigoong 村で5軒の住宅が全焼した。
- (35) Budak teh teu pati kaurus, sukuna budug awakna dekil.  
 子供 否定詞 あまり *ka*-世話する 足 皮膚疾患 体 汚い  
 (その)子はあまり世話されておらず、足は皮膚疾患にかかり、体は汚い。

例(31)～(33)は、それぞれ「記録されている」、「水が入っている」、「隠されている」という結果状態の継続の意味を表す。これらの例は、上記の過程を示す図に基づいて分析すると、次のようになる。

行為・働きかけ	→	変化	→	結果	→	結果状態
<i>nyatet</i>	→		→	<i>dicatet</i>	→	<i>kacatet</i>
<i>N</i> -記録する				<i>di</i> -記録する		<i>ka</i> -記録する
「記録した」				「記録された」		「記録されている」
<i>ngeusian</i>	→		→	<i>dieusian</i>	→	<i>kaeusian</i>

～に <i>N</i> -入れる	～に <i>di</i> -入れる	<i>ka</i> -入れる
「～に入れた」	「～に入れられた」	「～に入っている」
<i>nyumputkeun</i> →	<i>disumputkeun</i> →	<i>kasumputkeun</i>
<i>N</i> -隠す	<i>di</i> -隠す	<i>ka</i> -隠す
「隠した」	「隠された」	「隠されている」

上の図から、(31) ～ (33) の例で示された結果状態の意味は、行為の部分で「*N*-動詞」構文に含意された顕在的な動作主の積極的な働きかけがあつて、はじめて生じた結果状態であることが分かる。つまり、これらの例文内に用いられる「*ka*-動詞」構文は、結果状態の意味を表すと同時に、働きかけ自体にも言及していると言えよう。それに対して、例 (34) と (35) はやや異なる振る舞いを示している。

(34) の例は、火事が何らかの理由で起きて、5 軒の家が全焼したという結果をもたらしたという事象を述べた表現であり、(35) の例は、話し手が足に皮膚疾患のある汚い子供を見て、その子供の現状を述べた表現である<sup>11</sup>。両方とも結果状態を表す点では共通しているが、顕在的な動作主からの働きかけはなく、自然にそのような結果状態になったという点では (31) ～ (33) の例と異なっているのは明らかである。そのため、例 (34) と (35) の例文内に用いられた「*ka*-動詞」構文は、働きかけには言及できない自動詞的な表現であると考えられる。これについて影山 (2001 : 29) は、「他力によるのではなく、自力で～」と見なされる場合、自動詞表現が得られる」と述べている。

上記をまとめると、結果状態の陳述は、同じ結果状態を表していても、意味構造の観点から見ると二通りあることが分かった。それは、結果状態の意味を表すと同時に、顕在的な動作主の働きかけ自体にも言及できるタイプと、働きかけまでは言及できない自動詞的な表現である。

### 3.3 結果状態の陳述用法の「*ka*-動詞」構文の構文的な特徴

本節では、「*ka*-動詞」構文の構文的な特徴を能動文との対応性、主語の特性、そして動作主の特性といった観点から分析を行う。

#### 3.3.1 結果状態の陳述用法「*ka*-動詞」構文と能動文との対応性

非意図的受け身用法「*ka*-動詞」構文は、条件付きで能動文と直接対応することが可能だ

<sup>11</sup> スンダ語において、*duruk* という動詞の本来の意味は「燃やす」という意味だが、結果状態の意味を表す「*ka*-動詞」構文の形で用いられる場合は、「焼ける」あるいは「全焼する」という意味を表す。

が、結果状態の陳述用法「ka-動詞」構文の場合はどうだろうか。以下の例を見てみよう。

(36) Nu pikaseurieun, bet henteu kaganti kabéh, …

関係代名詞 面白い なぜ 否定詞 ka-換える

面白いことに、なぜ全部換えてないのだろう…

(37) Dina pelat tektonik, pelat Eurasia kaasup di jerona

で プレート テクトニクス プレート ユーラシア ka-入る に 中

Eropa jeung kalolobaan Asia.

ヨーロッパ と ほとんどアジア

プレートテクトニクスにおいて、ヨーロッパとアジアのほとんどはユーラシアプレートの中に入っている。

例 (36) の *kaganti* 「換えてある」は、上述の意味構造に基づいた過程から見ると、「換える」という行為の結果、変化と結果の部分で対象となる物が換えられ、そして結果状態として「換えてある」ということになる。その過程を見てわかるように、能動文と対応しているのは「ka-動詞」構文ではなく、変化と結果の部分を表す「di-動詞」構文である。そのため、結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文は対応関係にある能動文を持つことができない。また、例 (37) の *kaasup* 「入っている」は、(36) と異なる意味構造を有し、自動詞的表現の結果状態の陳述用法であるため、対応関係にある能動文を持つことができない。つまり、結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文は、基本的に対応関係にある能動文を持つことが不可能であると言えよう。

### 3.3.2 結果状態の陳述用法「ka-動詞」構文の主語について

結果状態の陳述用法「ka-動詞」構文の主語には、他の受動文と同じように有情物と非情物が立ち得る。しかし、両者の間には意味役割の点で違いがある。「di-動詞」構文と非図的受け身の「ka-動詞」構文の主語は被動作主という意味役割を担うのに対して、結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文の主語の意味役割は主題であると考えられる。その理由は、例 (24) ～ (27)、(31) ～ (37) を見ればわかるように、それらの文の主語と述語の意味関係は、「～がどのようにされる」という関係にあるのではなく、「～は～という状態である」という関係にあるからだと思われる。上記の例のうち一つを再掲して分析してみよう。

(38) Ngaran urang katulis dina akte jual beuli tanah.

名前 私 ka-書く に 証明書 売買 土地

私の名前は土地の売買証明書に書かれている (書いてある)。(再掲)

意味構造の観点から考えると、「書いてある」という状態は、動作主が「話し手の名前を書く」という動作を行い、結果として話し手の名前が書かれるようになったと解釈できる。ここまでは話し手の名前は被動作主であるが、「ka-動詞」構文に転換させることによって、話し手の名前は主題になると考えられる。その過程は以下のように示すことができる。

S Nulis <u>ngaran urang</u> (とある動作主)は <u>私の名前</u> を書いた	私の名前＝働きかけを受ける客体＝ 被動作主
↓	↓
<u>Ngaran urang</u> ditulis ku S <u>私の名前</u> は(とある動作主)に書かれた	結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文 による主題化プロセス
↓	↓
<u>Ngaran urang</u> katulis <u>私の名前</u> は書いてある	「私の名前」について何を述べるか＝ 主題

上のような現象は他の言語にも見られる。山田（2004：34）は、日本語において、この過程を主題化と言っている。彼によれば、主題化とは、前の文で話題になっていることに関連づけて言う場合にその要素を前に出す過程である。例えば「この本、どうしたの？」「その本は、おじさんが買ってくれたの」のように、前に話題として出ているヲ格の「本」が主題化されて前に出るといった例である。また、これについて、宮地（2006：164-165）は、「が」格を取る項と「を」格を取る項は「は」格によって主題化され、そして「は」格による主題化には、「～には」、「～では」、そして「～からは」のような形もあると述べた。

### 3.3.3 結果状態の陳述用法「ka-動詞」構文の動作主について

この用法の動作主については 2.3.2 節でも少し触れたが、本節ではより詳しく考察を行いたい。結果状態の陳述用法「ka-動詞」構文の動作主は基本的に文中には現れない。無理に動作主を入れてしまうと、その文の意味が変わったり、文そのものが不適格な文になったりすると考えられる。以下の例を見てみよう。

(39) Eweuh rusiah anu kasumputkeun.

ない 秘密 関係代名詞 ka-隠す

隠されている秘密はない。(再掲)

(40) Ewewuh dompet anu kasumputkeun ku si Budi

ない 財布 関係代飯 ka-隠す に ブディ  
ブディさんに（非意図的に）隠された財布はない。

- (41) 5 imah kaduruk di desa Leuwigoong.

5 家 ka-燃やす に 村 Leuwigoong  
Leuwigoong 村で5軒の住宅が全焼した。（再掲）

- (42) Baju urang kaduruk ku si Budi.

服 私 ka-燃やす に ブディ  
私の服はブディに非意図的に燃やされた。

- (43) Dina pelat tektonik, pelat Eurasia kaasup di jerona

で プレート テクトニクス プレート ユーラシア ka-入る に 中  
Eropa jeung kalolobaan Asia.  
ヨーロッパ と ほとんどアジア  
プレートテクトニクスにおいて、ヨーロッパとアジアのほとんどはユーラシアプレートの中に入っている。（再掲）

上記の例を見てもわかるように、いずれの例も動作主が文中には現れない。無理に動作主を入れてしまうと、その文の意味が変わったり、文そのものが不適格な文になったりすると考えられる。

まず、例（39）は、結果状態の意味を表すと同時に、顕在的な動作主の働きかけ自体にも言及できるタイプの「ka-動詞」構文である。しかし、文が表す全体的な意味や文脈などの理由で、無理に文末に動作主を入れると不適格な文になる。仮に、同じ述語動詞の（40）のような例で、動作主が文内に現るとすれば、事象が非意図的に行われたという意味しか表すことができない。次に、例（41）の場合は、前節で述べたように自動詞的な表現で、基本的に顕在的な動作主の働きかけはないタイプの「ka-動詞」構文であるため、文中に動作主を入れることは不可能である。ただし、同じ述語動詞でも、主語を変え、特定の動作主を取り入れると、例（42）を見ればわかるように、話し手が動作主に非意図的に服を燃やされてしまったという意味になる。一方、その文から動作主を抜くと、例（41）と同じように、文全体は「私の服が焼けた」という結果状態の意味を表すようになる。最後に、例（43）は自動詞的な表現の一種と見なされるが、他の二つの例と比較すると、最も自動性が高い文であることがわかる。例（39）と（41）の「ka-動詞」構文の語幹となる動詞は両方とも他動詞であるのに対して、（43）の「ka-動詞」構文の語幹となるのは *asup*「入る」という自動詞である。この動詞は、ka-接頭辞を付けられることによって「入る」という動作を表す自動詞から「属している」という状態を表す自動詞に変わる。そのため、（43）の例に動作主を取り入れることは不可能だと考えられる。

### 3.4 結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文の成立条件について

以上、結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文のさまざまな特徴を分析した。本節では、それらの特徴に基づいて、この「ka-動詞」構文の成立条件を整理する。

結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文の成立条件は以下のようである。

第一条件 結果状態の陳述用法「ka-動詞」構文は、形態的な特徴として、動詞内に視覚できる結果状態を含意するものに限って、第一クラス、第二クラス、そして第三クラス他動詞から形成できる。その他、まれにはあるが、自動詞からも形成できるが、その場合は、本来の意味からより状態的な意味に変化する。例えば、*asup*「入る」が *kaasup*「属する」になる、など。

第二条件 結果状態をもたらした事象が意図的かどうかは不問である。

第三条件 結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文は対応関係にある能動文を持たない。

第四条件 文の主語の位置を支配するものは主題の意味役割を担う。

第五条件 文内に動作主を取り入れることができない。

### 4. 自発用法の「ka-動詞」構文について

柴谷（2000）は自発態の定義について次のように述べる。自発態とは、動作主の意思によらず、事態がもたらされるという意味を表す。例えば「昔のことが思い出される」のような文は、動作主が意図性を持っているものの、その文で表される事象の生起の根源は動作主ではなく、外的要因にある。このように、文法的な手段で自発態を表すのが日本語の特徴であり、英語にはない。あえて、英語で上記の文を表現しようとするならば、”The picture reminded me of the old days.” という文を用いることになる。もちろん、「昔のことが思い出される」というのは、英語の文に書いてあるように「写真を見る」ことが原因でもたらされる結果かもしれないが、日本語と英語の例を比べて見ると、統語的にも意味的にも両者が異なっていることは一目瞭然である。それに対して、スンダ語には、日本語の「昔のことが思い出される」と全く同じ表現形式がある。以下の例を見てみよう。

(44) (Urang) *kaingetan jaman baheula*.

私 ka-思い出させる 時代 昔

（私は）昔の時代が思い出される。→ 昔の事が思い出される。

例（44）は、動作主である私が何らかの原因で自然に昔のことを思い出してしまうという意味を表す。訳を見れば分かるように、(44) の *kaingetan* は、形態的にも、統語的そして意味的にも、日本語の「思い出される」と一対一の対応をなしている。実は、非意図的受け身用法と状態の陳述用法の他に、スンダ語の「ka-動詞」構文は、自発用法として用い



られる場合もある。従来のスンダ語の研究においては、筆者が知る限り、「ka-動詞」構文の自発用法について論じた研究者はまだ一人もいない。そのため、このような用法にどのような制約があるのか、そして何を条件にこの用法が意味的に成立するのかについては、まだ明らかではない。そのため、本節では、この用法の形態的特徴、意味的特徴、そして構文的な特徴の観点から分析を行い、その成立条件を明確にしたい。

#### 4.1 自発用法の「ka-動詞」構文の形態的な特徴

先述したように、従来のスンダ語の研究では「ka-動詞」構文が一概に「非意図的受動文」とであるとされている。従って、「ka-接頭辞」と共起できるのは、第一クラス他動詞、第二クラス他動詞、そして第三クラス他動詞であると一般化されてしまう。確かに、非意図的受け身用法に関しては、2.1.4節で述べた条件さえ満たせばその意味が成立するが、2.2節で論じた結果状態の陳述用法「ka-動詞」構文の語幹となり得る動詞は、Coolsma (1985) が提案した第一クラスから第三クラスの動詞であっても制約があり、そしてまれではあるが、自動詞の語幹もあり得ることが判明した。そのため、自発用法「ka-動詞」構文の語幹になり得る動詞についても、再考察する必要がある。以下の例を見てみよう。

- (45) Karasa sedih lamun emut ka wanoja anu dipikacinta.

ka-感じる 悲しい もし 覚える に 女性 関係代名詞 愛される  
愛される女性に覚えると悲しく感じられる。  
→ 愛しい女性のことを思い出すと悲しく感じられる。

- (46) Sok<sup>12</sup> kagagas<sup>13</sup> pangalaman anu baheula.

擬態語 ka-思い出させる 経験 関係代名詞 昔  
昔の経験が思い出されて感動するようになる。  
→ 昔経験したことが思い出される。

- (47) Hawar-hawar<sup>14</sup> kadenge sora adzan<sup>15</sup> ti lembur sabelah.

擬態語 ka-聞く 声 アザン から 村 隣  
となりの村から呼びかけの声が聞こえる。

例(45)の述語動詞の語幹は、*ngarasa* 「感じる」という感情を表す自動詞である。次に、例(46)は、例(44)の述語動詞とほぼ同じ意味を表すが、形態的には異なる二つの

<sup>12</sup> *sok* というのは「自然にそうなる」というニュアンスを表す擬態語であり、スンダ語の自発的表現とよく一緒に用いられる。

<sup>13</sup> *kagagas* という動詞は、*kaingetan* と同じく、思い出されるという自発の意味を表すが、*kagagas* は、思い出されて、感動、感激の気持ちがよみがえるという意味まで含んでいる。

<sup>14</sup> *hawar-hawar* は、音または声が遠くから聞こえる様子を表す擬態語である。

<sup>15</sup> *adzan* は、イスラム教におけるお祈りの呼びかけのことをいう。

動詞である。例 (44) の述語動詞の *kaingetan* は、「ka-」接頭辞と *ingetan* 「思い出させる／注意する」という第二クラス他動詞との共起で構成された単語であるのに対して、例 (46) の *kagagas* 「思い出される」は、「ka-」接頭辞を *gas* 「思い出させて、感動させる」という第一クラス他動詞に付けて形成された単語である。*gagas* は *ngingetan* と違って、現在形が能動文に用いられることはない。そのため、文の中で使われる場合は、常に「ka-gagas」の形で自発用法として用いられる。最後に、例 (47) の述語動詞の語幹は、*denge* 「聞く」という第一クラス他動詞に分類される知覚動詞である。

論者が調べた結果、自発用法「ka-動詞」構文の語幹になり得るものは、数少ない感情、知覚、思考を表す動詞のみである。具体的には、*ngarasa* 「感じる」という自動詞、*gagas* 「思い出させて、感動させる」、*ngingetan* 「思い出させる・注意する」という他動詞、そして *denge* 「聞く」と *tinggali* 「見る」という他動詞である。ただ、スンダ語には、それぞれの単語に各レベルの敬語において同じ意味を表す動詞があるので、それらも自発用法「ka-動詞」構文の語幹になり得ると考えられる。例えば、*ngingetan* 「思い出させる・注意する」の代わりに、尊敬語においては *ngemutan* 「思い出させる・注意する」が用いられる。そのため、目上の人には何かが思い出されるということを他人に間接文で伝える場合は以下ようになる。

(48) Saurna Pak guru sok kaemutan pangalamanna anu tipayun.

～そうだ 先生 擬態語 ka-思い出させる 経験 関係代名詞 過去

先生は過去の経験が思い出されるそうだ。

→ 先生は過去に経験したことが思い出されるとおっしゃった。”

## 4.2 自発用法の「ka-動詞」構文の意味的な特徴

澤田 (2006) は、自発の意味について、知覚主体が対象を知覚する際に、意図的・意識的に知覚しようとしなくても、それが自然に知覚できる意味を表すとしている。例えば、窓を開けると月が見えたり、ピアノの音が聞こえたりする場合、私達は意識的に・意図的に目をこらしたり、耳をすませたわけではない。自発用法の「ka-動詞」構文が表す意味もそれに当てはまる。具体例をあげて、考察してみよう。

(49) Ti kaanggangan katinggali si Ujang nu keur ngudag neng Nira.

から 遠く ka-見る ウジャング 関係代名詞 現在進行機能語 追う ニラ

遠くからニラさんを追っているウジャングが見える。

(50) Lamun ninggali makam teh sok kapikiran maot.

もし 見る お墓 擬態語 ka-(～を考える) 死

お墓を見ると、死について考えさせられる。

例 (49) は、話し手が意図的にウジャングの方に目を向けるのではなく、ニラさんを追っているウジャングさんが話し手の視野に入り、自然に見えるという意味を表す。例 (50) は、話し手がお墓を見たために、死のことが自然に頭の中に浮かんでくるという意味を表すと考えられる。

### 4.3 自発用法の「ka-動詞」構文の構文的な特徴

本節では先述した非意図的受動文の「ka-動詞構文」と結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文と同じく、自発用法の「ka-動詞」構文の特徴を、能動文との対応性と動作主、そして主語の観点から考察を行う。

#### 4.3.1 自発用法の「ka-動詞」構文と能動文との対応性

自発文はある事象が自然に起きるという意味を表す表現であり、能動文で表される意図的な行為や働きかけがもたらした事象を表しているのではない。そのため、自発用法の「ka-動詞」構文は、直接受身の「di-動詞」構文や非意図的受動文の「ka-動詞」構文<sup>16</sup>（わざとでない・非意図的にという副詞と共起）のように、直接的に「N-動詞」能動文と対応関係にあるとは考えにくい。(50) の例をもう一度見てみよう。

(51) Lamun ninggali makam teh sok kapikiran maot.

もし 見る お墓 擬態語 ka-(～を考える) 死

お墓を見ると、死について考えさせられる。(50)の再掲)

スンダ語で、この例に対応する能動文を導き出すことは非常に困難である。対応関係にある能動文があるとすれば、使役構文でしか表すことができない。つまり「墓を見ることが私に死について考えさせる」という意味を表す文でなければならない。この文をスンダ語で表現すると以下ようになる。

(52) Ninggali makam nyieun urang mikiran maot

見る お墓 作る・make 私 考える 死

例 (52) は「X MAKES Y BECOME Z」の使役文のパターンであり、形式的には、[MAKE]を意味する[NYIEUN]「作る」を使って作ることはできるが、そのような構文は、スンダ語の日常的な言語運用においては全く使われないと言っても過言ではない。実は、スンダ語には、使役化の機能を担う「-keun」接尾辞がある。そのため、「飲ませる」や「食べさせる」などの一般的な使役構文を作る際は、その接尾辞が多く用いられる。また、「-keun」には、

<sup>16</sup> 対応する能動文の述語動詞の前にわざとでない・非意図的にという意味を表す副詞を付けなければならない (2.1.3.1 を参照)

使役化することによって自動詞を他動詞化する機能がある。例えば、*diuk*「座る」は *diukkeun* 「座らせる」になる。しかし、「-keun」接尾辞の使役化機能は、先に述べたようなものに  
限られているので、例（52）のような構造の文と同じような意味をこの接尾辞を使って表  
すことはできない。

以上のことから、スンダ語には、自発用法の「ka-動詞」構文に対応する能動文は存在し  
ないと考えられる。

#### 4.3.2 自発用法の「ka-動詞」構文の主語について

自発用法の「ka-動詞」構文の例を見ると、ほとんどの文に、主語の位置を支配する部分  
が現れないが、その理由は二通りあると考えられる。まずは、主語が話し手である第一人  
称であるため、省略しても文全体の意味解釈に支障がない場合と、そもそも主語が表れる  
ことができない場合である。それは、「ka-動詞」構文の語幹となる動詞の種類に左右され  
る。語幹が自動詞の場合は、たいてい主語が現れることができないのに対して、語幹が他  
動詞の場合は、主語が文中に現われやすいと考えられる。以下の例を見てみよう。

(53) *Karasa sedih lamun emut ka wanoja anu dipikacinta.*

ka-感じる 悲しい もし 覚える に 女性 関係代名詞 愛される  
愛される女性に覚えると悲しく感じられる。

→ 愛しい女性のことを思い出すと悲しく感じられる。((45)の再掲)

(54) *Sok kagagas pangalaman anu baheula.*

擬態語 ka-思い出させる 経験 関係代名詞 昔  
昔の経験が思い出されて感動するようになる。

→ 昔経験したことが思い出される。((46)の再掲)

例（53）は主語が現れることができないタイプで、*karasa*「感じる」の前に主語を入れ  
ると不適格な文になってしまう。それに対して、例（54）では、*sok kagagas* 「思い出さ  
れる」の前に「私」という主語が存在する。もともと「ka-動詞」構文は受動的な構文であ  
るため、自発用法はそこから発達した用法であると考えられる。そのため、*gagas* 「思い  
出させる」のような語幹の「ka-動詞」構文にも、文法上は非意図的な受け身用法と同じく  
対応する能動文が存在する。例（54）で省略されている「私」は、もともと能動文の目的  
語の位置を占めているため、受動化プロセスによって（54）の主語に転じている。一方（53）  
の例は、自動詞派生の自発用法で、もとの能動文においても、項は主語の「私」だけなた  
め、受動化プロセスによって「私」が主語位置から外されると、主語の位置は何もない状  
態になってしまう。以上をまとめると以下のようなになる。

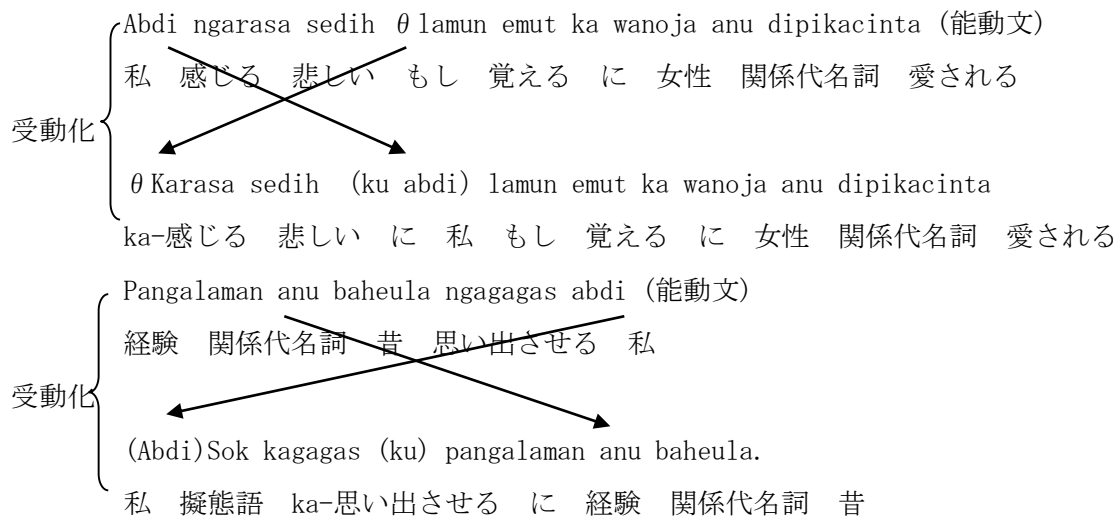


図 4.3.2

#### 4.3.3 自発用法の「ka-動詞」構文の動作主について

柴谷 (2000) によると、自発の (非意図的) 動作主は、主語の位置にある場合と主語の位置から外される場合がある。スンダ語の自発用法の「ka-動詞」構文を考えてみると、4.3.2 の図からわかるように、主語の位置にあるのは他動詞派生の自発用法であるのに対し、主語の位置から外されるのは自動詞派生の自発用法であると考えられる。上であげた例を見てもわかるように、主語の位置にある「動作主」も、主語の位置から外れた「動作主」も、両方とも文内には現れず、例 (48) を除き、全部省略されているのがわかる。その原因は次のように考えられる。自発用法の「ka-動詞」構文においては、動作主とはいっても、事象自体は自然に生じるため、事象を自ら起こす動作主ではなく、むしろ経験者 (EXPERIENCER) として取り扱う方が適切だと思われるからである。「動作主」に比べて、「経験者」は、ある事象に自ら働きかけをしないため、省略されやすい性質を持っている。以下の例を見てみよう。

(55) Suku si Uang katincak ku urang.

足 ウジャング ka-踏まれる に 私

ウジャングさんの足は私に (非意図的に) 踏まれた。

(56) Ti kaangangan katinggali si Ujang nu keur ngudag neng Nira.

から 遠く ka-見る ウジャング 関係代名詞 現在進行機能語 追う ニラ

遠くからニラさんを追っているウジャングが見える。((49)の再掲)

例 (55) の *ku urang* 「私によって」は動作主である。さらにその文では、話し手と動作主が同一人物であり、踏むという行為が非意図的であることを表すために用いられている。そのため、「私に」という動作主の部分無くすと、話し手と動作主が同じ人物であるかど

うかが判断できず、その文によって伝達しようとしている「私が非意図的に踏んでしまった」という意味が成立しなくなってしまう。一方、例（56）において、経験者が第一人称の場合は、「経験者」が省略されても、「ニラさんを追っているウジャングの風景が見えるのは他の人ではなく、「私に」だ」と解釈するのが普通である。また、自発用法の「ka-動詞」構文の「経験者」は基本的に第一人称でなければならない。つまり、話し手と文中における経験者は同一人物でなければならないということとなる。

同じものを見たり、同じ経験をしたりするとしても、各人に自然に生じる心的作用（感情・知覚・思考など）は、一人ひとりの精神状態と健康状態、そして経験によって異なる。例えば、同じ風景を見たとしても、生まれ育った故郷が今見ている風景と同じような風景を持っている人物であれば、「故郷のことが思い出される」と言えるが、そうではない人物なら、そういう発言をする可能性は極めて低い。そのため、例（48）のように、自発用法の構文において、経験者が話し手以外の人物の場合は、話し手が何らかの形でその情報を共有して、はじめて言うことができると考えられる。例えば、例（48）の経験者である先生は、話し手に「昔経験したことが思い出される」ということを話したことがあり、話し手は「saurna “～だそうだ”」という伝聞の形で、他の第三者にその情報を伝えることができる。

#### 4.4 自発用法の「ka-動詞」構文の成立条件について

本節では上に述べた自発用法の「ka-動詞」構文の特徴に基づいて、その成立条件をまとめる。自発用法の「ka-動詞」構文の成立条件は以下のようになる。

第一条件 自発用法「ka-動詞」構文は、形態的な特徴として、他動詞だけでなく、自動詞も語幹になり得る。とはいえ、その数は少なく、基本的には、感情・知覚・思考を表す動詞に限られる。日常の言語運用上多く使われるのは *ngarasa* 「感じる」、*ngingetan* 「思い出させる・注意する」、*ngagagas* 「思い出させて、感動・感激させる」、*ninggali* 「見る」、*denge* 「聞く」、そして各敬語レベルにおいて同じ意味を表す動詞である。例えば、*ngingetan* 「思い出させる」に対応する尊敬語の動詞は *ngemutan* である。

第二条件 自発用法によって表される事象は自然に生じる。

第三条件 自発用法の「ka-動詞」構文は非意図的な受動文の「ka-動詞」構文から発達したものと考えられるため、他動詞派生の自発用法には、文法上対応する能動文があるものの、言語運用上は基本的に対応する能動文はないと考えてよい。

第四条件 文の主語に関して、他動詞派生の自発用法と自動詞用法の主語は基本的には

第一人称であり、そして経験者の意味役割を担う。そのため、文中で省略されやすい性質を持つ。第一人称以外の主体が主語になる場合は、話し手と主語になる主体が、何らかの形で、文に述べられることについての情報を共有していなければならない。

## 5. 可能文用法の「ka-動詞」構文について

可能文とは、対応する能動文の主体（能動主体）が意志的な動作を行おうとするとき、その動作の実現が可能か不可能かを表すものである（仁田：2009）。スンダ語には、可能文が三つあり、それは「*bisa* “できる” + *N*-動詞」構文と「*bisa* “できる” + *di*-動詞」構文と「*ka*-動詞」構文である。以下の例を見てみよう。

- (57) Urang bisa ngojay.

私 できる *N*-泳ぐ

私は泳ぐことができる。

- (58) Duit sesa balanja bisa dipake keur mayar telepon.

お金 残り 買い物 できる *di*-使う ために 払う 電話

買い物の残りのお金は電話代を払うために使われることができる。

- (59) A : Tadi nulis teu<sup>17</sup> ?

先 *N*-書く 否定詞

先のやつ、書いた？

B : Tulisanna oge teu kabaca!

書いた物 も 否定詞 *ka*-読む

書いた物が読めない。

→ 何を書いてあるのか読めない

例 (57) の *bisa* 「できる」は、「泳ぐ」という動詞を「泳ぐことができる・泳げる」という可能動詞に変換させる機能語である。これは、自動詞的瞬間動詞以外の動詞と共起すると、常に可能文として解釈される。「死ぬ」や「落ちる」などの自動詞的瞬間動詞と共起する場合は、「死ぬ・落ちることができる」ではなく、「死ぬ・落ちる可能性がある」という意味を表す。例 (58) の *bisa* 「できる」は、*pake* 「使われる」を「使われることができる」という意味に変えている。例 (59) では、動詞 *baca* 「読む」が「*ka*-」接頭辞を付けられることによって *kabaca* 「読まれる」という可能動詞になっている。論者は、「*bisa* 「できる」 + *N*-動詞」を能動的可能動詞とし、残りの二つの構文を受動的可能動詞と呼ぶこと

<sup>17</sup> *teu* は動詞と形容詞用の否定詞であるが、「はい」あるいは「いいえ」という答えを求める疑問詞が付かない疑問文を作る時によく用いられる。

にする。能動的可能動詞は、自動詞、他動詞を問わず、どのような動詞とでも共起し、可能動詞として用いられるが、受動的可能動詞の場合は他動詞からしか作れない。従って、*Ujang bisa diojay*「ウジャングは di-泳ぐ」や *Ujang kaojay*「ウジャングは ka-泳ぐ」のような可能文は非文であると考えられる。また、「ka-動詞」構文には様々な用法があるため、「bisa「できる」 + di-動詞」や他の用法の「ka-動詞」構文とどのように区別するか、そして意味の多義性によってどんな問題が起こり得るのか明確にしておかなければならない。そのため本節では、受動的可能構文に限って、他の用法の「ka-動詞」構文と同じように、形態的・意味的・構文的な特徴から可能文用法の「ka-動詞」構文を分析し、その成立条件を定める。

### 5.1 可能文用法の「ka-動詞」構文の形態的な特徴について

可能文用法の「ka-動詞」構文に用いられる受動的可能動詞が、他動詞からしか作れないのは明らかだが、全ての他動詞から作れるかどうかはまだ研究されていない。Coolisma (1985) は、全ての「ka-動詞」構文を第二受け身文として取り扱い、第一クラス動詞、第二クラス動詞、第三クラス動詞からしか形成できないとした。しかし、彼はあくまでも非意図的受動としての用法にしか注目しなかったため、可能文の述語となる受動的可能動詞が全ての他動詞から形成できるかどうかということには言及していない。そのため、本節では、形態的な特徴として、可能文用法の「ka-動詞」構文の述語動詞の語幹になり得る動詞について、実例をあげながら考察を行う。

- (60) Buku sakitu beuratna kaangkat ku si Ujang mah nya.

本 あれだけ 重い ka-持ち上げる に ウジャング  
あれだけ重い鞆（なのに）ウジャングは持ち上げられるよね。

- (61) ?Pinalti katajong teu ?

ペナルティキック ka-蹴る 否定詞？  
ペナルティキック、蹴れるか？

- (62) Solokan sameter wae mah kaluncatan ku urang oge.

溝 1メートル くらい ka-飛び越える に 私 も  
1メートルの溝ぐらいなら、私でも飛び越えられるよ。

- (63) ?Kantong-kantong anu mahal oge kabeulian ku pamajikan pejabat mah.

鞆(複数形) 関係代名詞 高い も ka-買う に 奥さん 幹部  
?高い鞆でも幹部の奥さんには次々と非意図的に買われる。

- (64) ?Nato kadaharkeun ku urang.

納豆 ka-食べさせる に 私



?納豆は私に食べさせられた。

(65) Tadi peuting mah awak rada kaistirahatkeun.

先 夜 体 多少 ka-休ませる

タベは多少体が休ませられた。

→ タベは多少体を休ませることができた。

例 (60) から (65) まで、各クラスの動詞の例を二つずつ挙げた。それらの例を見ればわかるように、同じクラスでも、可能文として容認されるものと容認されないものがある。結論から言うと、可能文用法の「ka-動詞」構文の語幹になれる動詞は二項動詞だけである。その理由は、可能文用法の「ka-動詞」構文は受身用法の「ka-動詞」構文と同じく、常に主語に立つ被動作主と動作主を要求するからである。それを裏付けるため、動詞のクラス別に詳しく述べる。

まず、例 (60) と (61) では、第一クラス動詞が用いられているが、基本的には、他動詞の基本動詞であればすべて受動的可能動詞に変えることができる。しかし、上の例を見ると、(60) は可能文として容認できるのに対して、(61) は容認できない。その原因は、動詞の性質にあるのではなく、主語の違いにあると考えられる。例 (60) の主語である「鞆」は「持ち上げられる」行為の実際の対象であるのに対して、例 (61) で実際に「蹴られる」のは「ペナルティキック」ではなく、「ボール」である。確かに、日本語の訳では可能文として成立するが、可能文用法の「ka-動詞」構文の主語を支配する名詞句は、行為が向けられた直接の対象でなければならない。つまり、ペナルティキックをボールに入れ替えれば、例 (61) の文は可能文として成立すると考えられる。また、例 (61) は例 (60) と違って、「非意図的に蹴られたか」という解釈も可能だが、それは、場面と状況、そして現場における文脈による。例 (60) には、「あれだけ重い」という鞆の状態を説明する修飾形容詞があるため、可能文としか解釈されない。

次に、例 (62) と (63) を見てみよう。これらの例で使われているのは第二クラス動詞であるが、元の動詞のタイプが異なっている。例 (62) の語幹は *luncat* 「ジャンプする・飛び跳ねる」という自動詞で、それが「-an」という接尾辞によって他動詞化され、二項動詞になっている。そのため、「ka-動詞」構文によって受動化され、可能文用法として用いられても、二つの項を持っているという条件をみたすので、可能文が成立すると考えられる。一方、例 (63) で使われているのは、他動詞由来の第二クラス動詞であり、「-an」接尾辞によって反復という意味が動詞に付け加わっている。もちろん、項の数は二つのままで、その点では、可能文用法が要求する条件を満たしているが、意味的に成立しない。それは、可能動詞が表す実現可能な能力というのは、ある程度持続性があり、反復されるものではないからだと考えられる。また、例 (63) は、非意図的受動文としても解釈できな

い。なぜなら、「買う」という動詞は意図性が強く、次々と非意図的に買われるという事象が起こる可能性は極めて低いからである。

最後に、例 (64) で使われている *daharkeun* 「食べさせる」という動詞は三項動詞であるため、可能文用法の「ka-動詞」構文の述語動詞の語幹になりにくい。それに対して、例 (65) の *kaistirahatkeun* 「休ませられる」の語幹は *istirahatkeun* 「休ませる」という二項動詞のため、可能文が成立する。*Istirahatkeun* 「休ませる」は *istirahat* 「休む」という自動詞に由来し、「-keun」という使役化接尾辞によって他動詞化され、二項動詞になっている。

## 5.2 可能文用法の「ka-動詞」構文の意味的な特徴について

可能文用法の「ka-動詞」構文は、他の可能文用法と同じく、ある動作主が意志的に何かをしようとする際に、それを実現することができるという意味を表す。スンダ語では、二項動詞の他動詞からなら、「*bisa* 「できる」 + *N*-動詞」構文と「*bisa* 「できる」 + *di*-動詞」構文と「*ka*-動詞」構文で、同じ事柄を表すことができる。以下の例を見てみよう。

(66) Tadi peuting mah rada bisa ngaistirahatkeun awak.

先 夜 多少 できる *N*-休ませる 体  
タベは多少体を休ませることができた。

(67) Tadi peuting mah awak rada bisa diistirahatkeun.

先 夜 体 多少 できる *di*-休ませる  
タベは多少体を休ませることができた。

(68) Tadi peuting mah awak rada kaistirahatkeun.

先 夜 体 多少 *ka*-休ませる  
タベは多少体が休ませられた。

→ タベは多少体を休ませることができた。((65)の再掲)

例 (66) ～ (68) は基本的に同じ意味を表すが、行為の連鎖と文の主題フォーカスの観点から考えると、それぞれの文で注目される部分が異なっている。例 (66) は動作主主題フォーカス文であり、行為を行う動作主に注目している。例 (67) は被動作主主題フォーカスであり、行為・働きかけがもたらした結果を受ける被動作主に注目している。そして最後に、例 (68) は結果主題フォーカス文で、行為がもたらした結果状態そのものに注目している。従って、上記の例は同じ事柄を表しているのではなく、行為連鎖に沿った階層的な繋がりを持っている。そのつながりは以下のように示すことができる。

行為	変化・結果	結果状態
<i>bisa ngaistirahatkeun</i> → <i>bisa diistirahatkeun</i> → <i>kaistirahatkeun</i>		

休ませることができる/休ませられることができる/休ませられることができるようになる

### 5.3 可能文用法の「ka-動詞」構文の構文的な特徴について

本節では、可能文用法の「ka-動詞」構文の構文的な特徴について、能動文との対応と主語の特徴、そして動作主の特徴の観点から分析を行う。

#### 5.3.1 可能文用法の「ka-動詞」構文の能動文との対応性

可能文用法の「ka-動詞」構文は、結果状態の陳述用法と自発用法の「ka-動詞」構文と同じく、基本的に対応関係にある能動文を持っていない。なぜなら、自発用法の「ka-動詞」構文は、ある事象を成立させる、もしくはある行為を意図的に実現させる能力があるかどうかという状態を表す自動詞的な構文だからである。

(69) Tulisan leutik oge kabaca ari make kacamata mah.

書いたもの 小さい も ka-読む なら 使う めがね  
小さく書いた文字でもめがねを使うと読める。

(70) Urang bisa maca tulisan leutik oge ari make kacamata mah.

私 できる N-読む 書いた物 小さい も なら 使う めがね  
めがねをかけたら、(私は) 小さく書いた文字でも読むことができる。

(71) Tulisan leutik oge bisa dibaca ari make kacamata mah.

書いたもの 小さい も できる di-読む なら 使う めがね  
小さく書いた文字でもめがねを使うと読める。

上記の例を見れば分かるように、能動文である(70)と対応関係にあるのは例(69)ではなく、例(71)である。

#### 5.3.2 可能文用法の「ka-動詞」構文の主語について

可能文用法の「ka-動詞」構文は常に二項を要求するため、主語の特徴の観点から見ると、非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文と同じように、有情物でも非情物でも主語の位置を支配することできる。また、主語の意味役割も、被動作主という点では他の受け身表現の主語と同じ性質を持っていると言えよう。

#### 5.3.3 可能文用法の「ka-動詞」構文の動作主について

可能文用法の「ka-動詞」構文の動作主に関しても、有情物でも非情物でも動作主になれるが、感情・知覚・思考など、有情物あるいは人間に特有な動詞が述語動詞の場合は、有情物あるいは人間に限られる。

#### 5.3.4 可能文用法の「ka-動詞」構文の成立条件について

本節では、上に述べた可能文用法の「ka-動詞」構文の特徴に基づいて、その成立条件を述べる。可能文用法の「ka-動詞」構文の成立条件は以下のようである。

第一条件 可能文用法「ka-動詞」構文は、形態的な特徴として、語幹になり得る動詞は二項を有する他動詞である。

第二条件 可能文用法「ka-動詞」構文には対応する能動文がない。

第三条件 可能文用法「ka-動詞」構文の主語は、有情物・非情物問わず、文内に存在する。

第四条件 可能文用法「ka-動詞」構文の動作主に関しては、有情物でも非情物でも動作主になれるが、感情・知覚・思考など、有情物あるいは人間に特有な動詞が述語動詞の場合は、有情物あるいは人間に限られる。

### 6. 自動詞の受け身の「ka-動詞」構文について

先述したように、スンダ語にも、日本語と同じように自動詞から形成される受け身文が存在する。この種類の「ka-動詞」構文は、日本語の「第三者受け身」に似ていて、その事象が起きたことによって、話し手が何らかの被害を受けたり迷惑を受けたりすることを表す。しかし、分析してみると、その事象を起こすのはほとんど自然現象であることがわかる。以下の例を見てみよう。

(72) Budak teh batuk lantaran kamari kaanginan pas naek motor.

子供 咳 ～だから 機能 ka-風が吹く 時 乗る バイク

子供は、昨日バイクに乗った時、風に吹かれていたので、咳がある。

(73) Kecamatan dayeuh kolot mah unggal tahun kabanjiran.

区 dayeuh kolot 毎 年 ka-洪水を与える

Dayeuh kolot 区は毎年洪水になる。

上記の例以外にも、*kapanasan*「暑くなる」や *kaitiisan*「寒くなる」のような、自然現象が引き起こす事象であれば生産的に作ることができる。

### 7. 「ka-動詞」構文と日本語の「～（ら）れる」との対照

以上で、スンダ語の「ka-動詞」構文の様々な用法を見てきた。その中には、日本語の「～（ら）れる」にも見られる自発用法や可能文の用法もあった。しかし、同じ用法が存在していても、当然両者の間には相違点もある。従って、本節では、両言語に存在する自発表現と可能表現を中心に、「ka-動詞」構文と日本語の「～（ら）れる」を対照し、考察を行う。非意図的受け身用法と結果状態の陳述用法は、日本語では「～（ら）

れる」で表現されないため、本節では取り扱わないことにする。

## 7.1 自発用法「ka-動詞」構文と日本語の「～（ら）れる」の自発用法の対照

本節では、自発用法「ka-動詞」構文と日本語の「～（ら）れる」の自発用法を形態的・意味的・構文的な特徴の観点から対照する。しかし、その前に、日本語における自発構文について少し触れておくことにする。

仁田（2009）によれば、自発文とは、ある動きや思考、感情などが、能動主体の意志と関係なく、あるいはそれに反して主体の中で自然に起きてくることを表すものである。例えば：

- ・私には佐藤が犯人だと思われる。
- ・あの写真を見ると、笑えてしょうがない。（仁田：2009）

日本語の自発文の述語は、述語動詞の語幹に「～（ら）れる」を付加して形成する。また、仁田（2009）は、元の文が他動詞の場合、一般に「に、が」の文型をとり、能動主体を表す名詞は、「は」が付加されて「～には」あるいは「～は」となるのが普通であると述べた。例えば：

- ・この季節になると私{には／は}故郷の家が懐かしく思い出される。（仁田：2009）

次に、スンダ語の自発用法「ka-動詞」構文と日本語「～（ら）れる」構文を、形態的・意味的・構文的な特徴の観点から対照する。

自発用法「ka-動詞」構文		日本語の「～（ら）れる」	
(74)	Karasa sedih lamun emut ka wanoja ka-感じる 悲しい もし 覚える に 女性 女性のことを思い出すと悲しく感じられる。	⇔	女性のことを思い出すと悲しく感じられる。
(75)	Sok kagagas pangalaman anu baheula. 擬態語 ka-思い出させる 経験 関係代名詞 昔 昔の経験が思い出される。	⇔	昔の経験が思い出される。
(76)	Hawar-hawar kadenge sora adzan 擬態語 ka-聞く 声 アザン 遠くからお祈りの呼びかけの音が聞こえる。	⇔	遠くからお祈りの呼びかけの音が聞こえる。
(77)	対応する自発用法「ka-動詞」構文がない	⇔	私には佐藤が犯人だと思わ

れる。

- (78) 対応する自発用法「ka-動詞」構文がない ⇔ あの写真を見ると、笑えて  
しょうがない。

上記を見てわかるように、例 (74)、(75)、そして (76) では、スンダ語と日本語の自発用法が意味的に一致し、対応している。しかし、日本語の例 (77) と (78) に対応する自発用法は、スンダ語には存在しない。その理由は、日本語とスンダ語の自発用法の形態的な特徴の違いにあると考えられる。日本語もスンダ語も、自発構文の動詞に関して、思考・感覚・感情などを表す動詞からしか作れないという点は共通しているが、自発用法で使える動詞の語幹は、スンダ語の方が数が少ない。そのため、例 (77) と (78) の日本語の例をスンダ語で表現すると、「ka-動詞」構文ではなく、別の形式で表現することになる。例 (78) の場合は、*jadi hayang*～「～したくなる」と一緒に用いられて、以下のようなになる。

- (79) *Lamun ninggali foto itu, sok jadi hayang seuri.*

もし 見る 写真 その 擬態語 なる ～したい 笑う

その写真を見ると、(自然に) 笑いたくなる。

一方、例 (77) をスンダ語で表現する場合は、*Ceuk urang mah Sato Penjahatna.* 「私に言わせれば佐藤さんが犯人だ」という名詞文によって表現されることになる。

また、構文の特徴の観点から比べると、日本語もスンダ語も、経験者は文中に現れないが、日本語の経験者は主語の位置にあるのに対して、受動文の形式を取るスンダ語の経験者は、*ku*「によって」というマーカーでマークされ、動作主の位置に立つ。しかし、支配する位置が異なっているにもかかわらず、自発文の経験者は実際にその事象を自ら経験しなければならないので、通常は一人称であると考えられる。また、スンダ語の自発を論じた際に触れたように、一人称以外の人物を経験者として文内に登場させる場合は、何らかの形で、話し手と経験者が、文で述べられていることについて情報を共有していなければならない。スンダ語では伝聞を表す *cenah* / *saurna* (尊敬語) を用いる場合が多いが、日本語の場合は認識モダリティの形式が付加される。

## 7.2 可能文の「ka-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」との対照

可能文とは、スンダ語でも日本語でも、ある動作主が意図的に動作を行おうとするとき、その動作の実現が可能か不可能かを表すものである。しかし、形態的に見ると、日本語の可能文の接辞である「～(ら)れる」は自動詞と他動詞に付くことができるが、スンダ語の「ka-」接頭辞は、二項動詞に付いた時のみ受動的可能文を形成することができる。従って、日本語では「～(ら)れる」によって表現できるものが、スンダ語では別の可能文形式で表さなければならない。例えば、日本語では、「泳ぐ」を「泳げる」という可能動詞

にすることができるが、スンダ語の場合は、*ngojay*「泳ぐ」を *ka-ogjay*「ka-泳ぐ」にすることができない。述語動詞が自動詞の場合は、*bisa*「できる」+*N*-動詞という形が用いられる。その形式は、「死ぬ」、「落ちる」のような瞬間自動詞以外の動詞に当てはめると、能動的可能動詞を形成することができる。主語に関しては、受動文形式を取る「ka-動詞」構文の場合は、有情物でも非情物でも主語になり得る。それに対して、能動文の形式をとる日本語の「～（ら）れる」可能動詞のほとんどは、アニマシーが高い有情物を主語に取る。

- |      | 可能用法「ka-動詞」構文  |   | 日本語の「～（ら）れる」          |
|------|--|---|-----------------------|
| (80) | Tulisan leutik oge kabaca ari<br>書いたもの 小さい も ka-読む なら<br>make kacamata mah.<br>使う めがね<br>小さく書いた文字でもめがねを使うと読める。 | ⇔ | 小さく書いた文字でもめがねを使うと読める。 |
| (81) | Ti imah ka sakola bisa leumpang.<br>から 家 へ 学校 できる 歩く<br>家から学校までは歩ける。   | ⇔ | 学校から家までは歩ける。          |

## 第2章のまとめ

第2章では、非意図的受動文とされるスンダ語の「ka-動詞」構文と日本語の「～（ら）れる」の対照を行った。まず、「ka-動詞」構文の様々な用法の特徴と成立条件について分析を行ったところ、その用法には、非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文、結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文、自発用法の「ka-動詞」構文、そして可能文用法の「ka-動詞」構文があることがわかった。それぞれの用法を形態的、意味的、そして構文的特徴の観点から分析した結果、各用法の成立条件は下記のようになる。

非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文の成立条件は以下の通り：

- 第一条件 非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文は、他動詞からしか構成することができない。また、他動詞の中でも、「ka-動詞」構文に変換できるのは、基本他動詞と「語幹-an」派生動詞と「語幹-an」派生動詞のみである。
- 第二条件 話し手と動作主が、動作主の意図性の有無に関して共有知識を持っていないなければならない。
- 第三条件 （原因あるいは意図性のない非情物が動作主である場合を除いて）「動作主が自ら起こした事象には意図性がない」という意味を表す非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文は、*teu kahaja*「無意識的に」という副詞を取り入れた「*A*-構文」と対応しなければならない。
- 第四条件 非情物か有情物かを問わず、特定の主語と動作主が存在する。

次に、結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文の成立条件は以下の通り：

- 第一条件 結果状態の陳述用法「ka-動詞」構文は、形態的な特徴として、視覚可能な結果状態を含意する、第1クラス、第2クラス、第3クラス他動詞から形成できる。その他、まれに自動詞からも形成できるが、その場合は、本来の意味からより強い状態的な意味に変化する。例えば、*asup*「入る」が *kaasup*「属する」になるなど。
- 第二条件 結果状態をもたらした事象が意図的かどうかは不問。
- 第三条件 結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文は対応関係にある能動文を持たない。
- 第四条件 文の主語の位置を支配するものは主題の意味役割を担う。
- 第五条件 文内に動作主を取り入れることはできない。

そして、自発用法の「ka-動詞」構文の成立条件は以下の通り：

- 第一条件 自発用法「ka-動詞」構文は、形態的な特徴として、他動詞だけでなく、自動詞も語幹になり得る。とはいえ、その数は少なく、基本的には感情・知覚・思考を表す動詞に限られる。日常の言語運用上多く使われるのは、*ngarasa*「感じる」、



*ngingetan*「思い出させる・注意する」、*ngagagas*「思い出させて、感動・感激させる」、*ninggali*「見る」、*denge*「聞く」、そして各敬語レベルにおいて同じ意味を表す動詞である。例えば、*ngingetan*「思い出させる」に対応する尊敬語 *ngemutan* など。

第二条件 自発用法によって表される事象は自然に生じる。

第三条件 自発用法の「ka-動詞」構文は、非意図的な受動文の「ka-動詞」構文から発達したものと考えられるため、文法上は対応する能動文があるものの、言語運用上は、対応する能動文はないと考えてよい。

第四条件 文の主語に関して、他動詞派生の自発用法と自動詞用法の主語は、基本的には第一人称であり、経験者の意味役割を担う。そのため、省略されやすい性質を持つ。第一人称以外の主体が主語になる場合は、話し手と主語になる主体が、文で述べられていることについての情報を共有していなければならない。

最後に、可能文用法の「ka-動詞」構文の成立条件は以下の通り：

第一条件 可能文用法「ka-動詞」構文は、形態的な特徴として、二項を有する他動詞が語幹になり得る。

第二条件 可能文用法「ka-動詞」構文には対応する能動文がない。

第三条件 可能文用法「ka-動詞」構文の主語は、有情物・非情物を問わず、文内に存在する。

第四条件 可能文用法「ka-動詞」構文の動作主は、有情物でも非情物でもよいが、感情・知覚・思考など、有情物あるいは人間特有の動詞が述語動詞の場合は、有情物あるいは人間に限られる。

その後、日本語の「～（ら）れる」と対照したが、対応しているのは自発用法と可能文の用法の一部であることがわかった。意味的には対応していても、構文の形式から見ると、両言語は異なっている。スンダ語の場合、「ka-動詞」構文は受動的であるのに対して、日本語の「～（ら）れる」自発と可能文は能動的である。

## 第3章

### スンダ語における自動詞・他動詞の再考察

#### 1. 背景

スンダ語は、インドネシアにおいて、ジャワ語に続いて二番目に多く話される言語である。しかし、残念ながら、話者が多い割には、スンダ語を対象にした言語学的な研究や記述が多いと言うにはほど遠い状況にある。

スンダ語は、言語学の観点からみると、非常に豊かな言語であると言えよう。同じ語族のインドネシア語に比べて、スンダ語は接辞が多く、敬語体系や豊富な擬音語と擬態語のような特徴を多く有する。そのため、言語学的には、まだ幅広い研究領域が残っている。その一つは動詞分類であり、動詞分類の中でも、自動詞と他動詞の区別・分類については、論者が知る限り、集中的に研究を行っているスンダ語学者はまだいない。自動詞と他動詞の区別・分類が明確にされなければ、ヴォイスやモダリティのような研究も十分に行うことができないであろう。そのため、本章では、スンダ語の自動詞・他動詞の区別・分類について考察を試みたい。

#### 2. 先行研究と問題提起

スンダ語の動詞分類については、何人かの学者が記述を試みている。その中で最も古いのは Coolsma (1904) である。彼は、Husein Widjajakusumah (1985:114-138) の中で、スンダ語の動詞を基本動詞と派生動詞に分類した。さらに、派生動詞を語幹(Root)に付く接辞によってクラスに分けた。それらは、即ち、第1クラス動詞(N-語幹)、第2クラス動詞(N-語幹-an)、第3クラス動詞(N-語幹-keun)、第4クラス動詞(mang-語幹-keun)、第5クラス動詞(nyang-語幹-an/-keun)、第6クラス動詞(barang-語幹)、第7クラス動詞(語幹-an)、第8クラス動詞(語幹-eun)、第9クラス動詞(pi-語幹-eun)、第10クラス動詞(語幹の一部重複)、第11クラス動詞(語幹の一部重複-an)、第12クラス動詞(pa-語幹-an/φ)、第13クラス動詞(silih-語幹)、第14クラス動詞(si-語幹)、第15クラス動詞(ti-語幹)、第16クラス動詞(語幹+-um-)、第17クラス動詞(語幹+-in-) である。Coolsma はこのように動詞を分類したが、自動詞と他動詞については何も言及しなかった。むしろ、彼は、他動詞であろうが自動詞であろうが、全て第一クラス動詞に分類している。

Coolsma に続いて R. H. Robins (1970) は、スンダ語の動詞について、Diversification of Bloombury (1970) の中で次のように述べている。

“Verbs are subdivided into Transitive (*Vt*) and Intransitive (*Vi*)..., active transitive verb of non-derived verbs (Root verbs) are represented by the nasalized

form of the root.”

要するに、彼は、スンダ語の動詞は他動詞と自動詞に下位分類され、派生動詞ではない他動詞（基本動詞）は鼻音化の形で表現されると言う。補足説明すると、鼻音化の形とは、能動態を表す「*N-*」接頭辞を基本動詞に付加することである。しかし、彼は、自動詞と他動詞をそれ以上細かくは説明していない。

R. H. Robins (1970)の後には、Djajasudarma & Abdulwahid (1987)がスンダ語の動詞分類を試みた。Djajasudarma & Abdulwahid (1987:65)は、スンダ語動詞の最も大事な統合論的な特徴は、*henteu*「～ない」または *tara*「～ない（習慣的）」と共起することができることであるとした。したがって、ある単語が動詞かどうかを判断する際、その単語を *henteu*「～ない」または *tara*「～ない（習慣的）」と連結し、否定の意味を表すことができるかどうかで判断する。

語形からみると、スンダ語の動詞は基本動詞と派生動詞に分かれる。派生動詞とは、形容動詞、形容詞、または名詞が語幹になり、接辞の付加、または重複によって形成される動詞である。

Djajasudarma (1986)と Cece S. (1988)は、Quirk et al (1972)に基づいて、スンダ語の基本動詞を以下のように分類した。

- (i) Dynamic Verbs (動的動詞)
  - (a). Activity verbs (動作動詞)
  - (b). Process verbs (変化動詞)
  - (c). Verbs of bodily sensation (感覚動詞)
  - (d). Transitional Event Verbs
  - (e). Momentary verbs (瞬間動詞)
- (ii) Stative Verbs (状態動詞)
  - (a). Verbs of inert perception and cognition (知覚動詞)
  - (b). Relational verbs (関係動詞)

Quirk があげた単語の例と Djajasudarma があげた例を見ると、Quirk の動詞分類がスンダ語の動詞の分類に完全に当てはまるように見える。しかし、特に momentary verbs の説明と例を見ると、若干違いが見られる。Quirk は、momentary verbs が進行形を取ると反復の意味を表すと主張した。しかし、スンダ語の例を見てみると、必ずしもそうではないことがわかる。

以上で見てきたように、スンダ語の動詞分類についていくつかの試みがなされてきたものの、さまざまな問題が残っており、ましてや自動詞と他動詞の区別・分類については充

分に解明されているとはいえない。従って、スンダ語における自動詞と他動詞の区別・分類については再考察する必要がある。

### 3. スンダ語における自動詞と他動詞再考察

#### 3.1 定義と自他別の動詞分類について

スンダ語における自動詞と他動詞の区別・分類の分析に入る前に、動詞、そして自動詞と他動詞の定義を再確認する。動詞は、人の動作または行為を意味する品詞で、名詞とともに、品詞の中で最も重要なものであり、文の主要な素材をなす名詞をまとめて文を作り上げる働きを持っている（河野：1996）。

仁田（2009）は、動詞について、補語の取り方によって他動詞と自動詞に分かれると述べた。働きかけを向けられる対象を選択する動詞は他動詞であり、取らないものは自動詞である。他動詞は、主体からの働きかけによって対象に変化が生じることを表すのに対し、自動詞は、対象に影響を及ぼさない、主体による意思的な行為や、ある事態の発生という意味を表す。さらに、自動詞と他動詞の中で、形態的な対応関係を持つものを有対自動詞、有対他動詞と言う。後者は対象に変化を引き起こす動詞であり、前者は主体が変化することを表す動詞である。それに対して、対応関係を持たないものは、無対自動詞、無対他動詞と言う。一般的に自他対応を持つ有対自動詞・有対他動詞には3つのパターンがあり、それは、自動詞を基本として他動詞が成立するものと、他動詞を基本として自動詞が成立するもの、自動詞・他動詞のどちらも基本と言えないものである。

以上で、動詞、自動詞、他動詞の定義を再確認した。さらに、仁田（2000）が述べた自他別による動詞分類についても述べた。以下では、スンダ語の自他による動詞分類について再考察を行う。しかし、スンダ語の動詞を考察するには接辞の検討が欠かせないので、3.2 では、接辞を含めてスンダ語における形態的なプロセスを概観する。

#### 3.2 スンダ語における形態的なプロセス

以下で述べるのは、Budi R. (2001) によるスンダ語の接辞と重複の分類である。接辞は、基本的に接頭辞と挿入辞（infix）と接尾辞の3種類に分けられるが、それらを組み合わせで語根に付加する場合も多い。『言語学大辞典第2巻 世界言語編（中）』（p. 393）では、スンダ語の接辞について次のように述べている。接辞には、統辞法上の機能を担う屈折的なものと、語の派生に関わる派生的なものがある。屈折的なもののうち主要なものは、すべて動詞の活用にかかわる。それらは、能動、受動、自発、そして行為者の複数を標示する機能を担う。また、同じ接辞が屈折的なものと派生的なものの両方に属することもあると書かれている。

スンダ語の学校文法では、動詞に関わる接頭辞は全部で 13 種類ある。即ち：

#### A. 接頭辞

1. 「ba-」接頭辞は能動態を標示する。

例：joang + ba- → bajoang 「努力する」。

2. 「barang-」接頭辞は能動態を標示するが、特定の目的語または対象はなく、何らかの行動をすることを意味する。

例：beuli + barang- → barangbeuli  
買う 接頭辞 「(様々な物を) 買う」

3. 「di-」接頭辞は能動態と受動態の両方を標示することができる。「di-」接頭辞は、damel 「働く (丁寧)」と gawe 「働く (普通)」に付加される場合は能動態を表示する。そして、sapatu 「靴」や baju 「服」など身につけるものを指し示す名詞に付加されると能動態を標示し、「着る」「履く」「かぶる」という意味を表す。その他、この接頭辞は、sada 「音」という名詞に付加されると能動態を標示し、「出す」という意味を表す。「di-」接頭辞が上に述べた以外の動詞と名詞に付加される場合は、受動態を標示する。能動態を標示する「di-」接頭辞を説明する際、多くのスンダ語学者はよく diajar 「勉強する」を例に挙げる。しかし、よく考えてみるとそれは間違いであることが分かる。なぜなら、diajar 「教えられる」は、今では「勉強する」と解釈されているが、本来は ajar 「教える」の受動態だからである。スンダ語にはそもそも「勉強する」という動作を指し示す他動詞がなく、「勉強する」の代わりに「(誰かに) ～を教えられる」という文型が使われている。

例：a. damel + di- → didamel  
働く (丁寧) 接頭辞 働く  
b. sapatu + di- → disapatu  
靴 接頭辞 靴を履く  
c. sada + di- → disada  
音 接頭辞 音を出す  
d. baca + di- → dibaca  
読む 接頭辞 読まれる

4. 「ka-」接頭辞が動詞に付加される場合は、間接受け身を標示する機能を持つ。しかし、文脈によっては可能動詞と捉えられる場合もある。

例 a. tincak + ka- → katincak  
踏む 接頭辞 踏まれる

b. bawa	+	ka-	→	kabawa
持つ		接頭辞		持たれる／持つことができる
c. tenjo	+	ka-	→	katenjo
見る(普通)		接頭辞		見える

5. 「N-」接頭辞は能動態を標示する。また、この接頭辞は6つの異形態を持つ。その異形態は、語根となる動詞または他の品詞の始めの音によって左右される。即ち：

a. 「N-」接頭辞が b- または p- で始まる語根に付加すると、異形態 m- に変わる。

例 : baca	+	N-	→	maca
読む		接頭辞		読む
pencet	+	N-	→	mencet
揉む		接頭辞		揉む

b. 「N-」接頭辞が t- で始まる語根に付加すると、異形態 n- に変わる。

例 : tulis	+	N-	→	Nulis
書く		接頭辞		書く

c. 「N-」接頭辞が母音あるいは k- で始まる語根に付加すると、異形態 ng- に変わる。

例 : kedul	+	N-	→	Ngedul
怠ける		接頭辞		怠ける
ambek	+	N-	→	ngambek
怒る		接頭辞		怒る

d. 「N-」接頭辞が b-, d-, g-, h-, j-, l-, m-, n-, w-, y- で始まる語根に付加すると、異形態 nga- に変わる。

例 : goler	+	N-	→	ngagoler
横になる		接頭辞		横になる

e. 「N-」接頭辞が一音節からなる語根に付加すると、異形態 nge- に変わる。

例 : cap	+	N-	→	ngecap
はんこ		接頭辞		はんこを押す

f. 「N-」接頭辞が c-, s- で始まる語根に付加すると、異形態 ny- に変わる。

例 : carita	+	N-	→	nyarita
話す／話		接頭辞		話す／話をする

6. 「pa-」接頭辞は語根に付加され、能動態を構成し、「お互いに～合う」という意味を表す。その他、他の品詞に付加され、派生名詞を構成する機能も持つ。

例 : tanya	+	pa-	→	patanya
聞く		接頭辞		お互いに聞き合う

tani	+	pa-	→	patani
農業する		接頭辞		農家

7. 「pada-」接頭辞の主な役割は3つある。まず、語根となる他動詞に付加され、受動態を標示し、複数の主体から行為を受けるという意味を表す。次は、自動詞に付加されると能動態を標示し、複数の主体が同じ行為を行うという意味を表す。最後に、形容詞語根にこの接頭辞が付加されると、「同じく～」という意味が加えられる。

例：kepung	+	pada-	→	padangepung
囲む		接頭辞		(複数の相手に) 囲まれる
dagang	+	pada-	→	padadagang
商売する		接頭辞		(複数の人が同じく) 商売する
geulis	+	pada-	→	padageulis
きれい		接頭辞		(複数の人が同じく) きれいだ

8. 「para-」接頭辞は人間を指し示す名詞の複数形を作る働きを持つ。

例：guru	+	para-	→	paraguru
先生		接頭辞		先生方／先生達

9. 「per-」接頭辞は名詞に付加され、「～となる」という意味を表す。

例：tanda	+	per-	→	pertanda
表示		接頭辞		表示となる

10. 「pi-」接頭辞は gawe/damel 「働く」に付加されると命令形を構成し、「～しなさい」という意味を表す。また bapa (お父さん)、indung (お母さん)、そして dulur (親戚) などのような人を指す名詞に付加すると、「～として思う」という意味を表す。

例：gawe	+	pi-	→	pigawe
働く		接頭辞		～しなさい
bapa	+	pi-	→	pibapa
父		接頭辞		お父さんとして思う

11. 「silih-」接頭辞は動詞に付加され、「～し合う」という意味を表す。また、この接頭辞は sili-、pili-という2つの異形態を持っている。

例：teunggeul	+	silih-	→	silitenggeul
殴る		接頭辞		殴り合う

12. 「ti-」接頭辞は自動詞に付加され、無意志的に行動し、その行動によって被害を受けるという意味を表す。

例：teuleum	+	ti-	→	teuleum
潜る		接頭辞		溺れる

13. 「ting-」接頭辞は動詞に付加され、その動詞によって指し示される行為が複数の主体によって行われるということを表す。

例：gorowok	+	ting-	→	tinggorowok
叫ぶ		接頭辞		(複数の人が) 叫ぶ

## B. 接中辞

スンダ語における接中辞には3種類ある。

1. 「-ar-」接中辞は行為者が複数であることを表す機能を持つ。「-ar-」接中辞は「-al-」異形態を持っており、語根が l- で始まるか、語根の第一音節と第二音節の初頭以外の位置に -r- がある場合には -al-、その他の場合は -ar- になる。また、いずれの異形態も、母音で始まる語根に付加される場合は、接頭辞になる。

例：balik	+	-ar-	→	baralik
帰る／戻る		接中辞		(複数の主体が) 帰る／戻る
lesot	+	-ar-	→	lalesot
抜ける		接中辞		(複数のものが) 抜ける
ulin	+	-ar-	→	arulin
遊ぶ		接中辞		(複数の主体) が遊ぶ

2. 「-in-」接中辞の機能について述べるのは難しい。なぜなら、使用頻度が少なく、付加される語根も限られているからである。例えば tulis 「書く (普通)」と serat 「書く (丁寧)」に付加される場合は受動態を標示するが、panggih 「会う (普通)」に付加されると能動態を標示する。

例：tulis	+	-in-	→	tinulis
書く		接中辞		書かれた
panggih	+	-in-	→	pinanggih
会う		接中辞		会う (有様)

3. 「-um-」接中辞は能動態を標示し、「ずっと」という意味を表す。

例：gantung	+	-um-	→	gumantung
頼る		接中辞		(ずっと) 頼っている
jerit	+	-um-	→	jumerit
叫ぶ		接中辞		(ずっと) 叫んでいる

## C. 接尾辞

スンダ語には、動詞に付加される接尾辞が3種類ある。



1. 「-an」接尾辞は、屈折接辞としては命令形を標示する機能を持つ。派生接辞としては派生名詞を形成する機能を持つ。

例：cokot	+	-an	→	cokotan
取る		接尾辞		取る（命令形）
tulis	+	-an	→	tulisan
書く		接尾辞		書く（命令）／書き物

2. 「-eun」接尾辞は、知覚動詞に付いて、行為者が3人称であることを標示する。そして、「-an」と同じく、派生接辞としては、派生名詞を形成する機能を持つ。

例：dahar	+	-eun	→	dahareun
食べる		接尾辞		食べ（ラレル）もの
k adenge	+	-eun	→	kadengeeun
聞こえる		接尾辞		（彼に）聞こえる

3. 「-keun」接尾辞は命令形を標示する機能を持つ。

例：gambar	+	-keun	→	gambarkeun
描く		接尾辞		描く（命令形）

#### D. 接辞の組合せ

動詞に関わる接辞の組合せは9種類ある。

1. 「N- + -an」の組合せは能動態を標示し、行為の反復を表す。

例：cabak	+	N- -an	→	nyabakan
触る		接辞の組合せ		触る（反復）

2. 「di- + -an」の組合せは受動の反復を表す。

例：tajong	+	di- -an	→	ditajongan
蹴る		接辞の組合せ		蹴られる（反復）

3. 「ka- + -an」の組合せは（複数の行為者による）受動態を標示する。

例：tincak	+	ka- -an	→	katincakan
踏む		接辞の組合せ		（複数の相手に）踏まれる

4. 「pa- + -an」の組合せは、行為の場所を表す派生名詞を形成する機能を持つ。

例：mandi	+	pa- -an	→	pamandian
シャワーを浴びる		接辞の組合せ		シャワーを浴びる場

5. 「pang- + -keun」の組合せは、願望を表す能動態を標示する機能を持つ。

例：bawa	+	panb- -keun	→	pangmawakeun
持つ		接辞の組合せ		持つ（願望）

6. 「pi- + -eun」の組合せは未来を表す。

例：indit	+	pi- -eun	→	piinditeun
行く		接辞の組合せ		行く（未来）

7. 「pi- + ka-」の組合せは、状態動詞に付いて使役を表す。

例：bogoh	+	pika-	→	pikabogoh
恋をする		接辞の組合せ		恋をさせる

8. 「pika- + -eun」の組合せは、状態動詞または感情的な形容詞に付加され、使役を表す。

例：ambek	+	pika- -eun	→	pikaambeukeun
怒る		接辞の組合せ		怒らせる（性質）

9. 「-ar- + -an」の組合せは能動態を標示し、複数の行為者または主体による動作の反復を表す。

例：murag	+	-ar- -an	→	maruragan
落ちる		接辞の組合せ		（複数のものが次々に）落ちている

## E. 重複

スンダ語における重複は、完全重複（dwimurni）、部分重複（dwipurwa）と重声（dwireka）の3つに分けられる。重複の主要な機能は行為の反復の標示、物の複数性の標示、そして派生名詞の形成である。

### 1. 完全重複（dwimurni）

完全重複とは、一つの形態素の全体を反復する重複である。

例：awewe	→	awewe-awewe
女		複数の女
nini	→	nini-nini
祖母		老人女性

### 2. 部分重複（dwipurwa）

部分重複とは、1つの形態素の初頭音節のみを反復する重複である。

例：teunggeul	→	teuteunggeul
殴る		殴る（反復）
coba	→	cocoba
試みる		試み

### 3. 重声（dwireka）

重声とは、いずれかの音節を変えて、1つの形態素の全体を反復する重複である。

例 : paok                      →        puak-paok  
盗む                              (よく)盗む

### 3.3 スンダ語における動詞について

本節では、スンダ語学者が試みたスンダ語の動詞分類を参考にしながら、仁田 (2009) が提案した自他対応の有無による動詞分類にもとづいて、スンダ語の動詞の再考察を行う。

#### 3.3.1 スンダ語の基本動詞について

スンダ語の動詞は大きく 2 つに分けられる。それは基本動詞と派生動詞である。さらに、自他で分けると、基本動詞は基本自動詞と基本他動詞になり、派生動詞は派生自動詞と派生他動詞になる。スンダ語の基本自動詞は、文中で (一部の動詞を除き) ゼロ接頭辞の形で現れるのに対し、基本他動詞は、常に「N-」接頭辞を付加した形で用いられる。

- (1) Budak  $\phi$ -ceurik  
子供 泣く  
子供は泣いている。
- (2) Budak meuli roti.  
子供 N- beuli (買う) パン  
子供はパンを買う。

例 (1) の述語動詞は *ceurik* 「泣く」という自動詞で、 $\phi$  (ゼロ) 接頭辞の形で用いることができる。それに対して、例 (2) の述語動詞は *beuli* 「買う」という他動詞で、「N-」接頭辞が付加された *m-euli* 「買う」という鼻音化した形で用いられる。「N-動詞」は全部 2 項を持つ他動詞であるため、直接受け身文にすることもできるし、非意図的の受け身用法の語幹として用いることもできる。

#### 3.3.2 スンダ語の派生動詞について

Coolsma (1985) が提案した 17 クラス動詞は、自他の別を欠いているように見えるが、実際には、他動性が一番高いタイプの動詞から、順に他動性が低い動詞に分類されている。つまり、番号が大きければ大きいほど他動性が弱まっていくと考えられる。以下では、Coolsma (1904) が提案した動詞分類を他動性の観点から一つずつ確認し、派生自動詞、派生他動詞という 2 つのカテゴリーに分けて分類を行った。また、本節では、第 2 クラス以降の動詞を派生動詞と見なすこととする。

論者は、派生他動詞か派生自動詞かを判断するために、受け身にすることが可能かどうかのテストを行った。分析した結果、16 のクラスの動詞のうち、派生他動詞と認められ

るのは、第 2 クラス動詞 (N-語幹-an)、第 3 クラス動詞 (N-語幹-keun)、第 4 クラス動詞 (mang-語幹-keun)、第 5 クラス動詞 (nyang-語幹-an/--keun) だけであった。例えば、ngaluncatan「飛び越える」、ngamandikeun「シャワーを浴びさせる」などである。

一方、残りの第 6 クラス動詞 (barang-語幹)、第 7 クラス動詞 (語幹-an)、第 8 クラス動詞 (語幹-eun)、第 9 クラス動詞 (pi-語幹-eun)、第 10 クラス動詞 (語幹の一部重複)、第 11 クラス動詞 (語幹の一部重複-an)、第 12 クラス動詞 (pa-語幹-an/φ)、第 13 クラス動詞 (silih-語幹)、第 14 クラス動詞 (si-語幹)、第 15 クラス動詞 (ti-語幹)、第 16 クラス動詞 (語幹+-um-)、第 17 クラス動詞 (語幹+-in-) は、受け身文にすることができず、状態を表す自動詞的な文の中で用いられる。例えば、barangbeuli (多くの物を買う状態の意味を表す)、gumeulis「まるできれいな女性のように振る舞う」などである。

### 3.3.3 スンダ語における自他対応の有無による動詞分類

本節では、スンダ語における自他対応の有無による動詞分類の試みを示す。方法としては、日本語の動詞に対応するスンダ語の動詞を挙げる。まず有対自動詞を挙げて、その後、それに対応する有対他動詞を挙げる。

有対自動詞：

割れる (peupeus), 育つ (nga-gede-an), 決まる (di-tangtu-keun), 乾く (garing), 傾く (dengdek), 壊れる (ruksak), 挟まる (ka-gencet), 上がる (naek), 折れる (potong)

有対他動詞：

割る (me-(p)euskeun), 育てる (nga-gede-keun), 決める (Na-(ta)ngtukeun), 乾かす (nga-garing-keun), 傾ける (nga-dengdek-keun), 壊す (nga-ruksak / nga-ruksa-keun), 挟む (nga-gencet), 上げる (nga-naek-keun), 折る (m-(p)otongkeun)

次に、無対自動詞と無対他動詞の例を日本語とスンダ語で挙げる。

無対自動詞：

降る (turun), 泳ぐ (ng-ojay), 勝つ (meunang), さびる (ka-raha-an), 泣く (ceurik), 働く (di-gawe), 遊ぶ (ulin), 微笑む (seuri)

無対他動詞：

蹴る (N-(t)ajong), 打つ (N-(t)eunggeul), 叩く (N-(t)akol), 褒める (m-(p)uji),

投げる (m-(b)aledog-keun), 叱る (ny-(c)arek-an)

上記を見れば分かるように、日本語の自他対応はパターン化されていて、機械的に変換できるが、スンダ語の場合は、動詞によって付加される接辞が異なっている。それぞれの種類の動詞に付く接辞をまとめると以下のようなになる。

有対自動詞:  $N- + -an/di- + -keun/ka-/\phi$  (ゼロ接頭辞)

有対他動詞:  $N- + -keun/N-$

無対自動詞:  $N-/ka- + -an/di-/\theta$  (ゼロ接頭辞)

無対他動詞:  $N-/N- + -keun/N- + -an$

上記から、スンダ語における自動詞と他動詞の対応は、以下のようにまとめることができる:

1. 基本自動詞と「 $N$ -語幹-keun」派生他動詞
2. 「 $N$ -形容詞語幹-an」派生自動詞と「 $N$ -形容詞語幹-keun」派生他動詞
3. 「 $di$ -動詞語幹-keun」派生自動詞と「 $N$ -語幹-keun」派生他動詞
4. 結果状態陳述用法「 $ka$ -動詞」と基本他動詞

次に無対自動詞であるが、その中に *karahaan*「さびる」という動詞がある。*karahaan* は、*kahujan*「雨になられる」、*kaanginan*「風に吹かれる」、*kabanjiran*「洪水になられる」などと同じように、「自然に錆びになる」という発想からできた動詞である。つまり、そのような動詞は、自動詞の受け身用法によって形成され、何らかの形で主語に望ましくないことがもたらされることを表すと考えられる。

最後に、無対他動詞は、語彙的に結果状態の意味を含意しない。第二章で論じた結果状態陳述の用法「 $ka$ -動詞」構文と関連づけると、このタイプの動詞はその用法の述語動詞の語幹にはなり得ないと考えられる。

### 3.3.4 スンダ語における有対自動詞と有対他動詞の形態的対応について

上で見てきたように、スンダ語にも、日本語と同じく自他の対応を持つ他動詞と自動詞がある。上で述べたように、一般に自他の対応パターンには三つあり、それは、自動詞を基本として他動詞が成立ものと、他動詞を基本として自動詞が成立するもの、自動詞・他動詞のどちらも基本と言えないものである。スンダ語の自他対応は以下のように説明することができる。

1. 基本自動詞と「 $N$ -語幹-keun」派生他動詞が自他の対応の関係を持っている場合、自動

詞を基本として他動詞が成立するというパターンになる。つまり、基本自動詞が先に存在し、それに「*N*-語幹-*keun*」接周辞がつくことによって他動詞が成立する。例えば：  
peupeus(割れる)→(割る), murag(落ちる)→muragkeun(落とす)などである。

2. 結果状態陳述用法「*ka*-動詞」と基本他動詞が自他の対応を持っている場合、他動詞を基本として自動詞が成立するというパターンになる。つまり、他動詞が先に存在し、それをベースにして働きかけの結果状態を表す自動詞が派生する。例えば：  
nga-gencet(挟む)→ka-gencet(挟まる), n-(t)ekteuk(切る)→ka-teukteuk(切れる)などである。

## 第4章 結論

本研究では、スンダ語の「di-動詞」構文と「ka-動詞」構文の形態的、意味的な特徴、そして、能動文との対応や各構文に登場し得る主語と動作主などを含む構文的な特徴について分析を行った。その後、それらの構文に類似する機能を持つ日本語の「～（ら）れる」と意味と機能を中心に対照研究を行い、両言語の類似点と相違点を探った。さらに、今まであまり明らかにされてこなかったスンダ語の自動詞と他動詞の分類について考察を行った。以下では、第1章から第3章までで論じてきた内容をまとめ、最後に今後の展望を述べたいと思う。

### <第1章>

第1章では、日本語の「～（ら）れる」と対照をする前に、スンダ語の「di-動詞」構文の情報構造など、日常的な言語運用における「di-動詞」構文のさまざまな用法について詳しく分析し、記述した。それらの用法は、日本語の受け身に比べて、スンダ語の「di-動詞」構文の使用頻度が高い要因と考えられる。「di-動詞」構文には、指令法(jussive)、丁寧さ(politeness)、そして命令法(imperative)という用法がある。さらに、本章では、「di-動詞」構文とさまざまな表現の共起性についても考察を行った。「di-動詞」構文が共起可能な表現は、可能表現、義務表現、禁止表現、願望表現と難易表現である。その後、日本語の「～（ら）れる」と対照し、次の結果を得た。情報構造の観点から見ると、スンダ語の「di-動詞」構文によって伝達される情報は旧情報であるため、「di-動詞」構文は談話の冒頭には出にくい傾向があり、通常、聞き手に新情報を伝達するためには「N-動詞」構文が用いられる。一方、日本語の情報構造は、主題マーカー「ハ」によって区別されると言われている。つまり、情報の新旧の区別は、文脈の流れの中でその都度決定される。そのため、同じ事象について述べていても、両者は異なる言語形式を使うことになる。例えば、スンダ語の場合、冒頭で新しい情報として出現した「学費」は、述語動詞「払う」の直接目的語となり、能動文である「N-動詞」構文によって取り上げられる。そして、次の文では「学費」が旧情報になり、主語として、受動文である「di-構文」によって表される。一方、日本語の訳を見ると、冒頭でも次の文でも、述語動詞の目的語として能動文によって取り上げられていることがわかる。そのような両者の違いは、有生性と深く関係していると考えられる。スンダ語の場合、有生性の程度に関係なく、どんな名詞でも比較的自由に文の主語として現れることができる。それに対して日本語の場合は、有生性の高い名詞の方が主語になりやすい。そのため、スンダ語では、有生性が低い名詞でも、最初の文の目

的語を次の文では主語として表すことができるが、日本語の場合は、次の文で旧情報として現れる時も、最初の文と同じように主語にはなれず、能動文の目的語として現れることになる。また、直接受け身という用法では、スンダ語の「di-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」は正確に対応しているが、スンダ語の「di-動詞」構文が有する他の用法とさまざまな表現との共起性に関しては違いがあり、対応しないところが多い。その一つの要因には、スンダ語では有情物とともに非情物も受け身文の主語に成り得ることがあげられる。一方、日本語には、有生性が高い方が主語になりやすいという傾向がある。

## <第2章>

第2章では、非意図的受動文とされるスンダ語の「ka-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」の対照を行った。まず、「ka-動詞」構文の様々な用法の特徴と成立条件について分析を行ったところ、その用法には、非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文、結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文、自発用法の「ka-動詞」構文、そして可能文用法の「ka-動詞」構文があることがわかった。それぞれの用法を形態的、意味的、そして構文的特徴の観点から分析した結果、各用法の成立条件は下記ようになる。

非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文の成立条件は以下の通り：

- 第一条件 非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文は、他動詞からしか構成することができない。また、他動詞の中でも、「ka-動詞」構文に変換できるのは、基本他動詞と「語幹-an」派生動詞と「語幹-an」派生動詞のみである。
- 第二条件 話し手と動作主が、動作主の意図性の有無に関して共有知識を持っていないなければならない。
- 第三条件 (原因あるいは意図性のない非情物が動作主である場合を除いて)「動作主が自ら起こした事象には意図性がない」という意味を表す非意図的受け身用法の「ka-動詞」構文は、*teu kahaja*「無意識的に」という副詞を取り入れた「*A*-構文」と対応しなければならない。
- 第四条件 非情物か有情物かを問わず、特定の主語と動作主が存在する。

次に、結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文の成立条件は以下の通り：

- 第一条件 結果状態の陳述用法「ka-動詞」構文は、形態的な特徴として、視覚可能な結果状態を含意する、第1クラス、第2クラス、第3クラス他動詞から形成できる。その他、まれに自動詞からも形成できるが、その場合は、本来の意味からより強い状態的な意味に変化する。例えば、*asup*「入る」が *kaasup*「属する」になるなど。
- 第二条件 結果状態をもたらした事象が意図的かどうかは不問。



第三条件 結果状態の陳述用法の「ka-動詞」構文は対応関係にある能動文を持たない。

第四条件 文の主語の位置を支配するものは主題の意味役割を担う。

第五条件 文内に動作主を取り入れることはできない。

そして、自発用法の「ka-動詞」構文の成立条件は以下の通り：

第一条件 自発用法「ka-動詞」構文は、形態的な特徴として、他動詞だけでなく、自動詞も語幹になり得る。とはいえ、その数は少なく、基本的には感情・知覚・思考を表す動詞に限られる。日常の言語運用上多く使われるのは、*ngarasa*「感じる」、*ngingetan*「思い出させる・注意する」、*ngagagas*「思い出させて、感動・感激させる」、*ninggali*「見る」、*denge*「聞く」、そして各敬語レベルにおいて同じ意味を表す動詞である。例えば、*ngingetan*「思い出させる」に対応する尊敬語 *ngemutan* など。

第二条件 自発用法によって表される事象は自然に生じる。

第三条件 自発用法の「ka-動詞」構文は、非意図的な受動文の「ka-動詞」構文から発達したものと考えられるため、文法上は対応する能動文があるものの、言語運用上は、対応する能動文はないと考えてよい。

第四条件 文の主語に関して、他動詞派生の自発用法と自動詞用法の主語は、基本的には第一人称であり、経験者の意味役割を担う。そのため、省略されやすい性質を持つ。第一人称以外の主体が主語になる場合は、話し手と主語になる主体が、文で述べられていることについての情報を共有していなければならない。

最後に、可能文用法の「ka-動詞」構文の成立条件は以下の通り：

第一条件 可能文用法「ka-動詞」構文は、形態的な特徴として、二項を有する他動詞が語幹になり得る。

第二条件 可能文用法「ka-動詞」構文には対応する能動文がない。

第三条件 可能文用法「ka-動詞」構文の主語は、有情物・非情物を問わず、文内に存在する。

第四条件 可能文用法「ka-動詞」構文の動作主は、有情物でも非情物でもよいが、感情・知覚・思考など、有情物あるいは人間特有の動詞が述語動詞の場合は、有情物あるいは人間に限られる。

その後、日本語の「～（ら）れる」と対照したが、対応しているのは自発用法と可能文の用法の一部であることがわかった。意味的には対応していても、構文の形式から見ると、両言語は異なっている。スンダ語の場合、「ka-動詞」構文は受動的であるのに対して、日本語の「～（ら）れる」自発と可能文は能動的である。

### <第3章>

第3章では、仁田（2009）が提案したアプローチにもとづいて、スンダ語の自動詞と他動詞の区別・分類について再考察を行った。最初に、Coolisma（1904）が提案したスンダ語の動詞分類について再考察を行い、自他の区別によって再分類した。その結果、次のようなことが分かった。Coolisma が提案した 16 クラスの動詞のうち、派生他動詞と認められるのは、第2クラス動詞(N-語幹-an)、第3クラス動詞(N-語幹-keun)、第4クラス動詞(mang-語幹-keun)、第5クラス動詞(nyang-語幹-an/--keun)だけである。例えば、*ngaluncatan*「飛び越える」、*ngamandikeun*「シャワーを浴びさせる」などがそれに当たる。

一方、残りの第6クラス動詞(barang-語幹)、第7クラス動詞(語幹-an)、第8クラス動詞(語幹-eun)、第9クラス動詞(pi-語幹-eun)、第10クラス動詞(語幹の一部重複)、第11クラス動詞(語幹の一部重複-an)、第12クラス動詞(pa-語幹-an/φ)、第13クラス動詞(silih-語幹)、第14クラス動詞(si-語幹)、第15クラス動詞(ti-語幹)、第16クラス動詞(語幹+-um-)、第17クラス動詞(語幹+-in-)は、受け身文にすることができず、状態を表す自動詞的な文で用いられる。例えば、*barangbeuli*（多くの物を買う状態の意味を表す）、*gumeulis*「まるできれいな女性のように振る舞う」などがそれに当たる。

そのあと、仁田（2009）が提案したアプローチにもとづいて、スンダ語の自動詞と他動詞の区別・分類について再考察を行った。その結果は以下の通りである。

スンダ語において、自動詞と他動詞の自他対応は次のようになる。

1. 基本自動詞と「N-語幹-keun」派生他動詞
2. 「N-形容詞語幹-an」派生自動詞と「N-形容詞語幹-keun」派生他動詞
3. 「di-動詞語幹-keun」派生自動詞と「N-語幹-keun」派生他動詞
4. 結果状態陳述用法「ka-動詞」と基本他動詞

スンダ語にも、日本語と同じく自他の対応を持つ他動詞と自動詞がある。スンダ語においては、以下のように自他が対応している：

1. 基本自動詞と「N-語幹-keun」派生他動詞が自他の対応の関係を持っている場合、自動詞を基本として他動詞が成立している。つまり、基本自動詞が先に存在し、それに「N-語幹-keun」接周辞を付けると他動詞が成立する。例えば：*peupeus*(割れる)→（割る）、*murag*(落ちる)→*muragkeun*(落とす)など。
2. 結果状態陳述用法「ka-動詞」と基本他動詞が自他の対応の関係を持っている場合、他動詞を基本として自動詞が成立している。つまり、他動詞が先に存在し、それをベースに、働きかけの結果状態を表す自動詞が派生する。例えば：*nga-gencet*(挟む)→ *ka-gencet*(挟まる)、*n-(t)ekteuk*(切る)→*ka-teukteuk*(切れる)など。

以上が、本論文を通じて明確になったことである。しかし、先述したように、スンダ語

を対象にした言語学的な研究はまだ少ない。今後は、本研究をベースにして、スンダ語と日本語の「ナル型受け身」をより多くの視点から探っていきたい。それと同時に、インドネシアのスンダ語学者とともにより多くの研究を行い、スンダ語研究の今後の発展に貢献していきたい。

## 参考文献

- Coolsma, S. (1985) *Tata Bahasa Sunda*. Terjemahan Husein Widjadjakusumah dan Yus Rusyana. Jakarta: Djambatan.
- Danadibrata, R. A. (2006) *Kamus Basa Sunda*. Bandung: PT Kiblat Buku Utama
- Djajasudarma, T.F. (1980) *Tata Basa Sunda*. Bandung: Rahmat Cijulang.
- Huddleston & Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.
- Karna Yudibrata (1989) *Bagbagan Makena Basa Sunda*. Bandung: Rahmat Cijulang.
- Kats, J. & M..Soeridiradja (1982) *Tata Bahasa dan Ungkapan Bahasa Sunda*. Terjemahan Ayatroedi. Jakarta: Djambatan.
- Inu Isnaeni Sidiq (2012) *International Seminar on Improving The Competence of Conversation Skill in Learning Japanese Language in Secondary and Higher Education in Indonesia*, Asosiasi Studi Pendidikan Bahasa Jepang Indonesia: pp.341 -351.
- Quirk, Randolph et al. (1972) *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman Group Ltd.
- Robins, R. H. (1970) *Diversions of Bloomsbury*. North-Holland Publishing Company.
- Robins, R. H. (1983) *Sistem dan Struktur Bahasa Sunda*. Penerbit Djembatan (terjemahan).
- Siewierska, Anna. (1984) *The Passive, A Comparative Lingusitc Analysis*. London: Croom Helm.
- Sumarsono, Tatang. (1995) *Maher Basa Sunda*. Bandung: Geger Sunten.
- Tamsyah, Budi Rahayu. (1996) *Galuring Basa Sunda*. Bandung: Pustaka Setia.
- 安藤貞雄 (2012) 『現代英文法講義』 開拓社.
- 上田功・野田尚史 (2006) 『言外と言内の交流分野：小泉保博士傘寿記念論文集』、大学書林.
- 影山太郎・岸本秀樹 (2004) 『日本語の分析と言語類型—柴谷方良教授還暦記念論文集』、くろしお出版.
- 影山太郎 (編) (2008) 『日英対象・動詞の意味と構文』、大修館書店.
- 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 (編) (1989) 『言語学大辞典第 2 卷 世界言語編 (中)』、三省堂
- 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典 第 6 卷 術語編』、三省堂.
- 許明子 (2004) 『日本語の受身と韓国語の受身文の対照研究』、ひつじ書房.
- 久野暉 (1978) 『日本文法研究』、大修館書店.
- 佐久間淳一・加藤重広・町田健 (2006) 『言語学入門』、研究社.
- 佐久間鼎 (1966) 『現代日本語の表現と語法』、恒星社厚生閣
- 柴谷方良 (2000) 「ヴォイス」、仁田義雄他 (著) 『文の骨格』、岩波書店

- 高見健一 (1997)『機能的統語論』、くろしお出版.
- デディ・ステディ (2006)「インドネシア語の「di-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」  
との対照研究」『日本言語文化研究会論集第2号』 pp.303 - 339
- 寺村秀夫 (1982)『言語の対照的分析と記述の方法 (講座日本語学 10)』、明治書院.
- 名古屋大学日本語研究会 GA6 (2004)『ふしぎ発見! 日本語文法』、三弥井書店.
- 日本語記述文法研究会 (2009)『現代日本語文法2』、くろしお出版.
- 三上章 (1972)『現代語法序説』、くろしお出版
- 山田小枝 (1990)『モダリティ』、同学社.
- 山田敏弘 (2004)『国語教師が知っておきたい日本語文法』、くろしお出版.
- 湯浅彰子 (2003)「‘Volitionality’と‘Responsibility’—インドネシア語における3種の受動表現 ‘di-ter-ke-an」『甲南女子大学研究紀要 (文学・文化編 40号)』、pp 85 -91.
- リズキ・アンディニ (2012)「インドネシア語における受動文としての ter-構文の意味役割」  
*Nagoya Working Papers in Linguistics* 27、pp 13-28.

**辞書類：**

『広辞苑 (第五版)』、岩波書店、2002.

**データの出典：**

スンダ語の月刊誌 *CUPUMANIK*, 2003年1号(8月)-4号(11月).

R. Memed Sastrahadiprawira (2009) *Pangeran Kornel*. Bandung: Kiblat.

<http://chiebukuro.yahoo.co.jp/>